
ひとひらの夢

小日向ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとひらの夢

【Nコード】

N5122M

【作者名】

小日向ひなた

【あらすじ】

恋人もいないまま年齢を重ねて来た主人公、若菜。ある日疲れ切った体で電車に揺られていると、かつての恋人から声を掛けられる。それは、まるで運命の赤い糸が引き寄せた奇蹟のよう……。彼は、昔とはまるで違う紳士的な男性へと変貌を遂げていた。若菜の心に恋の炎が燃え上がる。時を経て再会した二人の恋の行方は……？

プロローグ（前書き）

時を経て、かつての恋人に出会い、そこから新たな恋が始まる。

ブローグ

乗りなれた電車。

疲れきった人達。

内藤若菜は、大きなバックを肩から下げ、車窓を眺めていた。外は暗く、窓に写るのは車内の風景だ。

誰もが疲れ、一日の仕事を終えた安堵感と倦怠感を宿しているように見える。

ある者はケイタイを操り。

ある者は目を閉じている。

ため息が出る。

(今日も収穫なしか・・・)

保険の外交員をしている若菜は、こここのところ新規の契約が取れずに、気分が落ち込み気味なのだ。毎日毎日、あちこちへと足を運ぶが、そう簡単に新規で契約が取れるものではない。分かつてはいても、新規が取れない日が続くと、疲れが余計にのしかかってくる。

(参ったな・・・)

考える事は、どうしても仕事の事ばかりだ。

疲れた顔を見たくは無いと思いつつも、窓へと目が行く。

そこに居るのは、見た目は綺麗だが、年齢を隠せない、疲れ切った自分がいる。

(ああ、嫌だ・・・毎日毎日電話一本で呼び出されて、大した用事でも無いのに。こっちから行けば、うるさがられるし。向いてないのかなあ)

ついついマイナスな考えが頭をもたげる。

こんな時は、誰かとアルコールで憂さを晴らすのが一番だが、残念ながら誘う相手がいない。

若菜位の年齢になれば、誰もが結婚して子供がいる。

家庭を放り出して、一緒に遊んでくれるような奇特な人間はいないのだ。

唯一いるにはいるが、今日は彼氏とデートと言っていた。

（いいよね、彼氏かぁ。私なんて恋人居ない歴……）

（数えたくも無い）

又、ため息が出る。

（しょうがないな、コンビニでお酒でも買って帰ろうかな）

そんな事をぼんやりと考えていた時、背後から声がした。

「若菜……じゃないか？」

自分の名前を呼び捨てにされて楽しい人はいない。

若菜も同様、眉間にシワを寄せて振り返った。

そこに居たのは、見覚えがありそうな顔だが、記憶が遥か遠く、思い出そうにも思い出せない。

怪訝そうにしていると、相手が笑って近寄ってきた。

「若菜だろ?! 忘れたのかよ、酷いなあ、昔の恋人を！」

と言って、又笑う。

その笑顔に記憶が蘇った。

そうだ、大学時代に付き合っていた山本浩二だ。

浩二は、スーツをスマートに着こなし、髪を綺麗に整え、白い歯を見せて笑っている。

疲れなど感じさせない清潔感の溢れた壮年と言う感じた。

「浩……二？」

昔が蘇る。

「そっだよ！思い出した？」

「ええ……でも、何で……」

今まで一度も出会わずに、18年が過ぎていたのだ、今夜電車の中で再会するなど誰が思うだろう。

「ビックリだよなあ。始めは他人の空似かと思ったけど、好きだった人の顔は忘れるものじゃないよなあ」

「ちよつと！」

誰に恥じる事も無いと言いたげに笑う浩二に、若菜は驚きながらも周囲に目をやった。

こんな事を言われて嬉しくない筈は無い、しかし公衆の面前で言われて有頂天になれる年齢でもないのだ。

「今仕事の帰りか？」

「そうよ」

一瞬忘れていた疲れが体に戻った気がした。

「毎日この電車なのか？」

「違うわ、今日はたまたま。浩二こそ」

「俺かあ？俺もたまたまだよ。これこそ、運命の赤い糸だな！」

「ちよつと！」

恥ずかしいが、嬉しい。

いくつになっても、男性から言われれば心が波立つ。

「結婚したのか？」

浩二の目が若菜の左手に注がれた。

しかし、若菜の指に結婚指輪は無い。あるのは、ファッションリングだけだ。

「してないよ」

「そうか、俺もだよ」

嬉しそうに浩二が若菜を見た。

電車が駅へと滑り込む。

疲れ切った人たちが、重い足取りで電車を降り、乗ってくる。

決して混む時間ではない。

「どこに住んでるんだ？近いの？」

「そうね、ここから30分位かな。そっちは？」

「似た様なもんだね。それで、大学を出て家に帰らず就職したのか？」

「そうだ。」

地方から都内の大学へ入学して浩二と恋に落ちた。

だが、その恋は若過ぎた。季節が幾つ変わったのか覚えていない

が、ある日突然幕が引かれたのだ。もう、どちらから先に幕を引いたのかすら覚えていない程昔の話だ。

そして卒業と共に就職した。

最初は都内のレンタルを主に扱う企業だった。

しかし、何年かすると周囲が結婚し、20歳も後半になれば会社に居辛くなった。

とうとう自分にはもっと向いてる仕事がある筈だと、退職したのだ。

だが、現実はそんなに甘くは無かった。

それから職を転々とし、現在の仕事に辿り着いたのだ。

生命保険の外交員。

人から有り難がられるのは、余程相手が困った状況になった時で、常は煙たがられる。

何度辞めようと思ったかしかない。

しかし、35歳になって入った会社だ。これ以上仕事を変える事もはばかられ、結局続けているのが実情だった。

「浩二は何やってるの？」

「サラリーマンだよ。別名営業マン」

「なるほどね。昔から、口が上手かったものね」

「参るなあ、口が上手いなんて言われると」

困った顔をしながらも楽しそうに笑って見せる。

（昔と随分違うな）

学生の頃は、気に障る様な事を言われると、すぐにむきになったものだ。

（そりゃ、お互い重ねてきたものがあるという事か）

若菜が、ふっと笑った。

「何が可笑しいの？」

「お互い変わったなって思ったのよ」

「そうか？俺は、確かにおじさんになったけど、若菜は昔のままだよ」

嘘でも嬉しかった。

（口が上手いのは変わらないか・・・）

「若菜、これからどうするんだ？」

「・・・・・・・・」

どうするのかと聞かれて、寂しく帰りますというのも気が引けた。とはいえ、嘘を言ったところで仕方が無い。

答えあぐねていると、浩二が言葉を繋いだ。

「せっかく会ったんだから、食事でもしないか？」

「食事・・・・・・・・？」

「ああ、俺ずつと若菜と会いたかったんだよ。せっかく会えたのに、このまま別れたくないんだ」

真っ直ぐに若菜を見つめる浩二。

若菜の心に、忘れ去られていたざわめきが起こった瞬間だった。

ブログ（後書き）

長らく鳴りを潜めておりましたが、新たな分野で再度投稿いたしました。

大人になった二人が、これからどのような恋を展開していくのか、ご期待ください。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお

願いします

第一話　ときめき

電車を降り改札口を出ると南風が気持ち良かった。

さつきまで疲れ切って風の暖かさを感じる余裕さえなかったというのに。

若菜は浩二と肩を並べながら、若かった頃を思い出していた。

あの頃の浩二は、若菜よりほんの少し背が高かった。

洗いざらしたＴシャツにＧパン姿で、良く笑い、良く怒っていた。お互いに愛し合っていた筈だった。

何度も肌を重ねた。

この愛が永遠に続くと思っていた。

「ここでいいかな、今日のところは」

浩二が止まって見上げている店は、洒落た感じのレストランだった。

しかし、決して腰が引けるようなお高く留まった感じではなく、どちらかと言えば温かみのある店構えだ。

「いいけど、ここ知ってるお店なの？」

「２回くらい来たかな。その程度だよ」

「そうなんだ・・・。」

「どうしたの？」

「うっん、私もあちこち出かけるけど、ここのお店は始めてだから」

「そりゃあ、良かった。この料理はなかなか上手いんだよ」

そう言いながら、店内へと足を踏み入れる。

奥から、落ち着いた感じの男性が出てきて、席へと案内してくれる。

お高く留まった感じが無いにしても、席への案内役が居るような店は、若菜にとっては久しい体験だ。いくら外回りと言っても、結局は保険外交員だ。

食事に誘われた所で、精々ファミレス位なものなのだ。

又、誘われるよりお客様をファミレスへお連れするという方が多い。

家では話がし辛いからという客は、どうしてもファミレスになってしまうのだ。

席に着くと、ゆっくりと店内を見回した。

落ち着いた雰囲気と、優しい色調、優しい音楽が邪魔にならない程度に流れている。

時間帯のせいか、お客の姿も少ない。

しかし、空いているテーブルも綺麗にセットされ、いつでも次の客を迎え入れる準備が整えられている。

ウェ이터がメニューを持って、テーブルにやってきた。

「何がいいかな。若菜、何を食べる？」

「そうね・・・」

メニューに目を向けるが、何を注文してよいのやら、全く分らない。

文字ばかりのメニュー。

若菜の脳裏に浮かぶのは、ファミレスの目で見て分かるメニューだ。

（ファミレスの方が分かり易くていいわね）

「浩二に任せるわ」

「よし！嫌いな物は無かったよな」

「ええ」

浩二がチラッとメニューに目をやり、ウェ이터に向かって言った言葉は。

「コースで」

と一言だった。

ウェ이터が「はい」と答えお辞儀をして戻って行く。

「何がいい分からない時は、コースにするのが一番なのさ」

と、若菜にウインクして見せた。

悪戯っぽい仕草だが、男の色気を感じさせる仕草でもある。

「俺、ここに好きな女^{ひと}を連れてきたかったんだよ」

真っ直ぐに若菜を見据えて浩二が言った。

まるで、若菜を連れてきたかったと言われている様で、ドキッと
する言葉だ。

「そ・そうなの。残念ね、好きな人じゃなくて」

「そうか？俺は念願を果たせたと、今幸せを感じてる所なんだがね」
「え……」

ときめきが戻ってくる。

昔のときめき。

「俺が結婚せずに、こんな歳まで独身なのって、どうしてだと思っ
？」

「さあ？」

「若菜が……忘れられなかったんだよ」

真っ直ぐに、若菜を見つめて浩二が穏やかに言葉を放つ。

大学を卒業して18年。

毎日、仕事に追われ生活するのがやっとで、恋愛どころではな
かった。

告白された事はある。

付き合った事もある。

しかし、どうしても最後の踏ん切りがつかなかったのだ。

それがどうしてなのか、ずっと若菜には分からなかった。

若い頃は、あんなに燃えるような恋をした。

溶けてしまうのではないかと思うほど、激しく重なりあった。

それが、歳を重ねるに従いそんな感情が薄らぎ、好きだと言われ
てもときめかなくなった。

それなのに、今浩二に真っ直ぐに見つめられると、どうしたこと
か心が波立つ。

胸が苦しくなる。

待っていたのだろうか。

ある筈の無い、偶然を・・・。

「若菜が結婚してなくて、良かった」

「・・・・・・・・」

「やり直さないか？ 若い頃には戻れないが、もう一度やり直したいんだ」

「・・・・・・・・」

言葉が出てこない。

嬉しいのに、躊躇う気持ちがあるのか、言葉が出て来ないのだ。ウエイターが料理を運んできた。

それは、温かそうに湯気が立っていた。

第一話　ときめき（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

昔の恋人との再会。凍った心を溶かすような温かく甘い言葉。
貴女ならこんな時、どうするでしょう？

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（　＾　＾　）　【ポチッ】とお
願いします

第二話 再び

食事の間、浩二は面白楽しい話ばかりを若菜に披露した。笑い過ぎて、食事が出来ない程だった。

こんなに楽しいのは久しぶりだと思った。

この時間が終わらないで欲しい。

「さすが、営業マンね」

「そうかなあ」

「営業マンはトークが大事だって聞いたわよ」

「そうかあ、そうかもしれないね」

あれだけ、真っ直ぐに若菜を見て、もう一度やり直したいと言った浩二だったが、あれから一言もそれらしい話はしなかった。

（あれは何だったの？）

（冗談？）

（浩二、もう一度言って！）

しかし、その店を出るまで浩二の口から、二度と若菜がときめく言葉は出ては来なかった。

浩二が時計に目を落とす。

「ああ、もうこんな時間か。ちょっと食事と思ったただけなのに、悪かったね」

若菜が時計に目を向けると、10時を過ぎていた。

「そうね、あつと言う間だったわ。楽しかった」

「そう思ukai?」

「ええ、とても楽しかったわ」

浩二は満足そうに笑った。

店を出ると、さすがに風が冷たく感じる。

春とはいえ、夜の風は冷たい。

又、駅へと肩を並べて歩く。

駅が近づくに従い、酔っぱらいの姿が目立つ。

程ほどに飲んで、気分良く歩いている者。

泥酔して、路上に座り込んでいる者。

いつもなら眉をしかめて見る光景も、今日の若菜には気にならなかった。

（さっきの言葉が冗談でも、ちょっとときめきを感じられたんだから、儲けものかな）

そんな事を考えていた時だった。

「さっきの返事聞いてないけど」

浩二が唐突に切り出した。

「何が？」

浩二が立ち止まり若菜を見つめる。

「もう一度・・・もう一度やり直したいんだ」

真剣だった。

真っ直ぐに若菜を見つめる浩二の瞳が、熱く語り掛けている。

「ずっと、忘れられなかったんだ。だから、俺、お前以外の女とは結婚したくなくて、ここまで来たんだ。頼むよ、もう一度やり直してくれ」

「でも・・・」

何であの時別れたのだろう。

若菜の心がアルバムをめくる。

「あの時、お前にふられて、俺はどれ程ショックだったか」

「え・・・違うわ。ふったのは浩二の方よ」

二人のアルバムがめくり続けられる。

しかし、めくられるページにあるのは、愛し合った頃の楽しい思い出ばかりだ。

どうして別れたのか、その悲しみのページだけが見つからない。

「多分、浩二が先に言い出したのよ」

「多分って・・・」

浩二の肩が大きく揺れ、可笑しくて仕方が無い様に笑った。

「覚えてないのか？」

「・・・・・・そうね・・・・・・はつきりとは」

「お前が俺に愛想を尽かしたんだよ。それで、勝手に怒って出て行ったんじゃないか」

「そうだったのだろうか。」

「思い出せない。」

「では、何故愛想を尽かしたのだろうか。」

「俺は、お前を失ってから自暴自棄だったよ」

「・・・・・・」

「二度と恋愛なんてしないと決めたんだ」

「・・・・・・」

「それが今日再会できた。それも若菜はまだ未婚だ。誰のものでもないって言うじゃないか。これは運命以外の何者でもないと思わないか？」

「・・・・・・」

「嫌いか？今でも俺が憎いか？」

「昔の浩二は、いつでも夢を追い駆けて熱く語っていた。」

「将来は何になりたいか。」

「自分はどんな人生を送るのか。」

「俺には、お前しかないんだ」

「楽しかった、大学時代。」

「若菜に会えた今夜を後悔したくない」

「（そうよ。私も浩二に会えて嬉しかった）」

「俺は、もう昔の俺じゃないんだ。40歳のオヤジだよ。それだけ苦勞もしてきた。あの頃みたいに若菜を哀しませる事なんてしないから」

「（哀しませる・・・・？）」

「愛してるんだ。ずっと、愛してたんだよ」

「別れのページが開いた。」

「そうだ、あの時別れたのはお互い辛い選択だった。」

浩二が借金をして、若菜が返済のために働いた。

借金の額が大きかったために、夜の仕事をするしかなかった。

それでも浩二は気にしていない様子だった。

それが、若菜を激怒させたのだ。

そして、間もなく別れを切り出した。

愛想が尽きた。

それが最後の言葉だった。

「今は真面目に働いてる。若菜を哀しませる事なんてしない」

（そうね、お互い苦労を重ねたものね）

「もう一度だけ、俺にチャンスをくれ」

車のライトが二人を照らして通り過ぎた。

（もう一度、もう一度だけ……。私も貴方を愛してた。きっと、ずっと愛し続けてきたのかもしれない）

若菜の心が波立つ。

熱い想いが湧き上がる。

若菜の唇が動いた。

「待っていたわ、浩二」

小さな呟きを、浩二は聞き逃さなかった。

春風が二人を優しく包み込んだ。

第二話 再び（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

どんどん気持ちたちが浩二へと向いていく若菜ですが、どんな恋愛が待っているのか・・・。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお
願います

第三話 弾む心

マンションに帰ると、いつもなら寒々とした部屋に明かりを点け、ため息混じりにTVを点けるのだが、その日の若菜は違っていた。

心が躍る、笑うつもりが無くても頬が緩む。

知らず知らずに鼻歌が出る。

朝の食器を洗うのも、苦にならない。

風呂に湯を張り、入浴の準備も面倒ではない。

要するに、何をするのも楽しいのだ。

体が軽く、心が弾む。

これが恋。

久しく忘れていた感情。

何もかもが輝いて見える。

これから何が起こるのか、楽しくて仕方が無いといった感じた。ゆっくりと湯に漬かり、考えるのは浩二の事ばかりだ。

『もう一度やり直さないか』

『愛してるんだ』

『もう一度だけ、俺にチャンスをくれ』

『若菜が結婚してなくて、良かった』

思い出し笑いがこぼれる。

『私も待っていたんだわ』

『ずっと誰に告白されても、この人じゃないって思ってきた』

『それは浩二と再会する為だったのね』

体中から、喜びが溢れ出る様な感覚。

『そうだ、次に会う日の約束をしなかった』

『後で、メールしようかな』

『でも、うるさいと思われないかな』

『どうしよう・・・』

思わずキヤーと叫びたくなるのを堪えて、風呂から出る。

化粧水と乳液をたっぷり顔につけ、鏡に映す。

「はぁ・・・年齢には勝てないよな」

「そうだ、栄養クリームがあつたよね」

たっぷり栄養クリームを顔に塗りつけ、一晩で10歳若くなれと願いを込める乙女心。

そこに、ケイタイが鳴った。

「こんな時間に誰だろう？」

ケイタイを開くと、さつき別れたばかりの浩二からだった。

「もしもし」

心なしか、いつもより声のトーンが上がる。

「若菜か？」

聞き覚えのある浩二の声だ。

「そうよ」

「さつき会ったばかりなのに、電話してごめん」

「ううん、大丈夫よ」

「次、いつ会えるかと思ってね。デートの約束をしなかったのを思い出したんだよ」

「あら」

同じ事を考えていたのかと可笑しくなった。

「そんなに笑うなよ。昔の恋人とはいえ、恥ずかしいだろう。自分でも、さつき会ったばかりでこんな電話、子供みたいだと思うけど、会いたいんだよ」

「そうじゃないわ。私も同じことを考えていたからよ」

素直に言えた、自分の気持ち。

浩二の気持ちを受け入れるまでは、小さな引つ掛かりがあつたが、浩二を受け入れた今、何も躊躇うものは無いのだ。

一挙に、若かったあの頃に戻ってしまった様な錯覚に捕らわれていた。

「本当か?! 嬉しいなあ」

「私もよ、浩二」

「それで、いつ会えるかな」

「そうね、仕事为空のが・・・日曜になるわ」

「日曜か。まだ、3日もあるのかぁ。夜は会えないの？」

「時間が決められない仕事だから、浩二は大丈夫なの？」

「若菜に会う為なら、都合を付けるよ。さすがに、この歳になって都合が付けられない平社員じゃないからね」

「あら、そんなに偉いの？」

「そんなにつて程でもないが・・・」

「役職あるの？」

「う・・・ん。まあね、あんまりプライベートで役職は言いたくないけど、若菜に信じてもらう為には仕方ないかな」

「そうね。聞きたいわ、浩二がどこまで頑張ったか」

「営業所の所長だよ」

「え！所長なの？」

「そうだよ」

「あの浩二が・・・信じられないわ」

「ずっと、あの頃の俺じゃないよ。参るな」

浩二の困った顔が目につく。

それと同時に、浩二が本当に頑張ってきたのだと嬉しく思えたのだ。

学生時代の浩二からは、想像もできない。

熱く政治を語り、役者になりたいと夢を見ていた、あの頃の青年が、今では営業所の所長だとは、誰が信じられるだろう。

「だから、若菜には辛い思いをさせないって言い切れるんだよ」

優しい声。

思いやりの籠った言葉。

胸が高鳴る。

体が熱くなるのが分かる。

「俺は時間のやりくりは出来るけど、若菜はお客がいるからな、日曜まで待つよ」

「ええ、ごめんね」

「いいさ、楽しみは先の方がいい」

「日曜の何時にどこにする？」

時間と場所を決めるまでに、更に時間が掛かった。

ほんの少しの会話でも楽しくて仕方が無いのだ。

気が付けば、深夜1時を超えていた。

「あ！寝なくちゃ。明日、早くにお得意様の所に行く事になってるのよ」

「大変だな。ごめんよ、遅くに」

「ううん、嬉しかったわ」

「お休み」

「お休みなさい」

電話を切るのが躊躇われる。

このままずっと話していたかったが、明日も仕事がある。

明日こそ、新規を獲得しなくては、プライドの問題もある。

どんどん若手が新規を挙げているというのに、ベテランの自分が新規を獲得できないとなれば、陰でどんな事を言われるかは想像がつく。

「早く寝て、明日に備えなくちゃ！」

若菜の部屋の明かりが消えた。

第三話 弾む心（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお

願いします

第四話 客

翌日は早くから客先へと急いだが、結局用件は大したものではなかった。

一縷の望みを掛けて出かけて行つたのだが、そんな甘い話がある筈も無い。

（小説なら、この辺りで新規獲得なんて筋書きもあるんだろうなあ。）

客に笑顔を向けながらも、ばやきが入る。

「悪いわね、せっかく来てくれたのに、当の本人がいないんじゃない話にならないわよね」

ここの客は、小さな会社を経営しているが、ここ数年不景気でしようがないともらしていた。

この手の客に、新規の相談をされると思ふ方が、可笑しいのかもしれない。

が、それでも希望を捨てられない事情があるのだ。

若菜は、作り笑いを浮かべながら、社長婦人の話し相手をしていった。

「あの人がね、保険を見直そうって言ってたんだけど」

「見直しですか？」

「そう、不景気じゃない。うちも苦しくてね、保険が高いから、何とか削減できないかって」

「保障を小さなものになさるんですか？」

「さあ？うちの人がどう考えているのか、分からないのよ」

「はあ……」

「それなのに、呼んでおいてなくなっちゃうんだから、本当に分からないわ」

社長婦人のため息が、重苦しさを増幅させる。

保険の削減と聞けば、笑顔で相談に乗らねばならないが、内心は

冗談じゃないと言いたい。

それでも、止められるよりはましだ。

「うちの元受が事業を縮小したとかって、この間言ってたのよね」
「大変ですね」

「そうなの、そうなるとうしたってうちの仕事も減らされるわ。
現に、仕事が減ってるんだから」

完全に愚痴に入っている。

「これ以上減らされたら、どうやって社員に給料を払ったらいいの
か・・・悩んじゃうじゃない」

「そうですね」

「金作にも走ってるみたいだけどね」

「社長さんですか？」

「そうよお。よく分からないんだけどね」

そう言いながら、社長婦人の指には、大きなダイヤが光り輝いて
いるのだ。

本当に、この婦人は現状を把握しているのかと訝しく思ってしまった。
う。

（ただの愚痴なら、時間の無駄だわ）

笑顔の下で、帰るタイミングを見計らっているのだが、なかなか
そのタイミングが掴めない。

上手い外交員になると、簡単にタイミングを掴んで、次の仕事へ
と繋いでいく所だが、若菜にはそんな芸当ができないのだ。

「でね、内藤さんって独身だったわよね」

「え、あ。はい」

「いい人がいるのよ。50歳で、奥さんと死に別れたそうなんだけ
ど、お子さんも大きくなって、再婚相手を探してるって言うのよ。
本当にいい人なんだけど、どうかと思って」

そういつて立ち上がると、何やら封筒を持ってくる。

（本心はこれか！）

いつの世にも、人の世話を焼きたがる人はいるものだ。

本当に保障の縮小の話だったのかなと、疑いたくもなるというものだ。

さすがに、仕事だけに笑顔だが、心の中では時間の無駄だと叫んでいるのだ。

「ああ、すいません。私、結婚は……」

「あら、お付き合いされてる方がいるの？」
疑いの眼差し。

今まで何度も、同じ目に出会ってきた。

30代の頃は、散々嫌な思いもしたし、はつきりと断る事が出来なかった。

その為、付き合う破目になり、結局断れば仕事に支障をきたす。公私を分けられない人が多いのだ。

だが若菜も40歳を迎え、さすがに肝が据わってきている。

「ええ、いるんですよ、それが」

笑ってこの場をやり過ごし、さっさと退散しようと目論んでいたのだ。

（今日も空振りかあ）

心の中は土砂降りの雨だ。

婦人は、さも残念そうに写真を仕舞ったが、最後にこう付け加えるの忘れなかった。

「又来て頂戴、保険を止めるから」

思わず「はあ？」と言葉が出たが、どうしようもないのだった。

客先を後にすると、無性に腹が立ってきた。

（どうして見合いを断ったからって、保険を止めることになるわけ？）

（それって、腹いせ？）

（どうして、ああいう人は公私をわきまえないわけ！）

目頭が熱くなる。

こういう時つくづく思うのだ、自分には合わないのではないかと。

今日も同じだ。

自分には、この仕事は無理なのだ。

次の客先へと足を向けながらも、辞めたいと繰り返す心の叫び。さすがに最近は無くなったが、30代の頃は体目当ての男性客も多かった。

特に、社長と名の付く中小企業だ。

全部とは言わないが、若菜に声を掛けてきたのはその手の類ばかりだった。

断れば切られる。

セクハラだと叫んでも、所詮は外交員だ。誰が助けてくれるわけでもない。

同僚の中には、新規を取る為なら手段を選ばないという者もいる。しかし、若菜にはそれが出来ない。

小さなプライド。

それが、最近はめっきり無くなった。

(それも悲しい現実よね)

以前は痴漢に遭っていたのに、年齢と共に痴漢も寄り付かなくなつたと、ぼやく年配の同僚がいるが、正にそれと同じではないか。

ため息が出る。

仕事もダメ。

女としての魅力も無い。

はつきりそう言われているような錯覚に襲われる。

(やつぱり合わないのかな、この仕事……)

(ああ……辛いよ……)

しかし、泣きたくても涙が出てこない。

ケイタイが鳴った。

バックからケイタイを取り出し、ディスプレイの文字を確認する。同僚の遠藤未来だ。

(ああ、未来か)

通話ボタンを押す。

「もしもし」

街中の雑踏の中で、他人の邪魔にならないように身を避けながら歩く。

この行動も慣れたものである。

「若菜？今どこ？」

「K町」

「近いね、お昼どうよ」

腕時計に目を向けると11時半を指している。

ほんの少し、客と話したつもりだったが、結局こんな時間になっ
てしまっていたのだ。

「そうね、じゃあ、食べようか」

気の合った同僚同士、近くにいれば一緒に食事をして、情報交換
をするのも単独行動の多い外交員の習慣だ。

「私、もう少しでK町に到着するから。駅前のファミレスでどう？」

「分かった、先に行って席をとっておくわ」

「了解。じゃ、後でね」

電話が切れた。

（ちょうど良かったかも、あの元氣印が一緒なら落ちた気分も浮上
できるかもね）

第四話 客（後書き）

お忙しい中、お読み頂きありがとうございます。
感想をいただけると作者の励みになりますので、よろしく願います。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお
願います

第五話 友達

先にファミレスに入り、窓際席に着く。

まずはドリンクバーを注文し、後は連れが来てからという事にする。

いつもと同じ。

先に来た者は飲み物だけで待つのだ。

勿論、午後のアポイント次第なのだが、それもこれも彼女達の中で自然と出来上がった暗黙のルールなだろう。

窓から駅前の雑踏を眺める。

ラッシュでも無いのに、どうしてこうも人が多いのかと不思議に思う。

その多くは子連れの主婦や年配者。

あるいは、スカートを短くした女子高生やルックスばかりを気にしている男子学生。

（学校の時間の筈だけだな）

ぼんやりと眺めながら（今時の学生は・・・）と否定的な考えが浮かぶ。

これもやはり年のせいかな？

それとも性格なのか？

若菜が育った頃は、学校がある筈の時間に駅前に学生が居るなど考えられなかったのだ。

授業に出ず、サボるというのは不良のする事と相場が決まっていた。

しかし最近の子は、サボっているから不良なのかというと、そうでも無さそうだ。

不良という定義が変わってきているのかもしれない。

そんな事をぼんやりと考えている所に、元気な声が聞こえてきた。

「待った？ごめんねえ」

目を声の方へ向けると、明るい色のスーツを着こなした未来が立っていた。

明るい表情に、肩まで伸ばした艶やかな髪、薄化粧でありながら透明感を感じさせる肌。

男でなくとも惚れ惚れする。

それに比べて自分は・・・と、いつも未来を見ると悲しくなってくる。

「暗いよー。どうしたのぉ？」

弾む笑顔で問いかけてくるが、若菜にはその笑顔が辛い。

昨日はあんなに若くなれと願いを込めて、お肌の手入れをしたのに、今朝鏡に映った自分の素顔は寝不足で目蓋の腫れたオバサンだ。(しょうがないよ。未来は35歳、私は40歳。この差は大きいって)

自嘲気味に笑うしかない。

それでも浩二は愛していると言ってくれた。変わらないと言ってくれたではないか。

(そうだ、私には浩二がいるじゃない！)

「ねえ、どうしたの？今日は、お得意さんに呼ばれたんだよね」心配そうに、若菜の顔を覗き込んで来る。

「そうよ、呼ばれて行きましたよ」

「新規・・・ダメだったんだ」

「見事にね。それどころか、最悪止められちゃうよ」

「何で！？」

話が核心に触れようとした時、ウェイトレスがメニューを持ってきた。

暫らく話を中断し、目で見て分かるメニューに視線を落とす。

いくらか見た所で、注文する物はいつもと何等変わらないのだが。注文を終え、話を促したのは未来だった。

「で、何で？」

「それがさ……」

愚痴になるとは思いながらも、愚痴らなければ次の客の所で笑顔が出ない。

愚痴を言える相手がいる。

それが、こういう時の強みになる。

同じ仕事仲間でなくては、いくら話しても分かつてはもらえないが、未来は同僚だ。

更には、今の職場で一番仲が良いのだ。

どんな愚痴でも嫌な顔をせず聞いてくれる、唯一信頼できる友達だ。

若菜は、さつき客の所で起こった事を、愚痴を交えて話した。

食事をしながら「ふーん」「そうなんだ」「ひどーい」と繰り返してくれる。

「あるよねえ、そういうの。自分の趣味で人の人生をかき回さないで欲しいわよ！」

未来も憤りを感じるとばかりに、愚痴が出る。

「私もこの間あったよ。見合いどころか、息子の嫁につて。冗談じゃない、そいつニートだよ！」

ああ、あの話かと思ったが、この間聞いたよとは言えない。

未来は友達も多い様で、誰に話したか覚えていないのだろう。

「でさ、断ったらやっぱり切れちゃった。うちの息子のどこが不満なんだって、奥さんが言うのよ。そりゃあ、不満だらけだよって言うてやりたかったわ。ニートだよ、ニート！仕事しろよって思うじゃない。仕事してから、結婚考えろよ！って」

「そうねえ。仕事もせずに結婚って言われてもね」
夕べの浩二が思い出される。

スーツを着こなし、大人の男といった色気を漂わせていた。

仕事もバリバリとこなし、今では営業所の所長だ。

（浩二と結婚したら私、営業所所長夫人だ！）

思わず顔がほころぶ。

「何をにやけた顔してるのよ!？」

「え?にやけてた?」

「さっきまで暗かったのに、こんどはニヤニヤしちゃって。変だよ」
確かに変かも知れない。

いや、確実に変だろう。

浩二の事を思い出すと、顔が緩むのだ。

それは、どうしようも出来ない。

「うん・・・それがね・・・うふふ・・・」

「気持ち悪いなあ」

「そう言わないでよ。良い事があつたんだもん、しょうがないですよ」

「ええ、客先で嫌な事があつたのに、今度は良い事があつたって・・・」

怪訝そうな目を向けてくる。

客先での嫌な事も屈辱的ではあつたが、それ以上に浩二との事が
幸せなのだ。

若菜は久しぶりの、この幸せな気分を未来に話したくなった。

誰かに聞いて欲しい、そして思いつきり惚気たいのだ。

「あのね、夕べさ・・・」

食後のドリンクを飲みながら、夕べの奇蹟のような出会いを話して聞かせた。

今まで、未来の恋愛話ばかり聞いてきたのだ、これ位は許される
だろうという想いがある。

そして、未来なら喜んでくれると思っていた。

「そうかあ!」

話し終わると、未来の顔が明るく輝いた。

「おめでとう!今夜はお祝いをしよう!!」

「え?お祝いつて、まだどうなるか分からないのよ」

「いいじゃない、前夜祭よ!」

「前夜祭つて、変じゃない?」

「そうかあ、じゃ取りあえず今夜は若菜の惚気を全部聞いてあげるから、どう？」

未来の手がお猪口を煽る手つきになる。

「いいね。飲もうか！」

「じゃあ、午後の仕事をやつつけて飲みに行こう！」

お互いの時間を調整しあい、いつもの店で落ち合う約束をすると、二人は別々の方向へと別れた。

さっきまで沈んでいた気分が、一挙に上がり晴れやかだ。

（よし！新規獲得目指して、回るか！）

大きく手を空に突き上げて、自分に渴を入れて歩き出した。

第五話 友達（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございます。
続きは又。。。。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお

願いします

第六話 居酒屋

新規を獲得するためには、足を使っしかない。
とにかく歩き、ドアを叩くのだ。

その日は、いつになく元気にドアを叩く事が出来た。
いつもなら、どうしてもドアの前で戸惑ってしまう。

（又、断られるに決まっている）

そんな想いが込み上げて来るのだ。

しかし、今日の若菜は違っていた。

住宅地に入り、チャイムを鳴らす。

家人が出てくれば笑顔でパンフレットを渡す。

興味のありそうな客だと思えば、踏み込んで話をする。

当たり前の営業スタイルだが、結構ストレスになる。

こうした積み重ねが、顧客獲得へと繋がるのだ。

勿論、行動したその日に収穫がある筈も無く、今日は新規を獲得する事無く営業所に戻ったのだが、それでも若菜には大きな達成感が漲っていた。

早々に業務日報を書き、上司に提出する。

嫌味の一つも言いたそうな上司を尻目に、営業所を後にした。

（いいんだ、やる事はやった！）

（毎日続けていけば、必ず道は開ける！）

「上がりですかあ？」

20代後半の同僚が、営業所に戻って来たのと出くわした。

「そう、今日は早かったわ」

「こっちは、又呼び出しですよ。今夜8時に来てくれって言われちゃいました。参りますよ」

「そう、大変ね」

「いいですねえ、内藤さんはそういう我侭な客がいなくて嫌味とも取れる言葉だが、今日の若菜は気にしなかった。」

先輩らしく、堂々と返したのだ。

「そんな事無いわ。今日は呼び出されなかっただけよ。みんな同じだから、頑張つて」

そう言つと、余裕の笑みを浮かべてその場を後にした。

何と言われようとどう思われようと、浩二さえいてくれたら若菜は幸せなのだ。

今日のような嫌な客でも、浩二の事を思い出しさえすれば、乗り越えられる。

（きつと、浩二と結婚して、誰もが羨むような結婚式を挙げて見せるわ）

早くも、若菜の心の中では、結婚への夢が膨らみ出していた。

いつもの居酒屋に入ったのは、7時近くだった。

まだ、客の姿もまばらで、居酒屋にしては寂しさを覚える。

それでも、程よい時間になれば店中が酔客の喧騒で、まともに話も出来なくなるのだが。

若菜も未来も又営業所の連中も、この店を良く使っていた。

それは、営業所から近く料金も良心的だという、一般市民に優しい居酒屋だからだ。

更に、女性が好む様なメニューが多いのだ。

未来よりも先に到着した若菜は、店の奥に座る事にした。

どつという訳か、人間というのは隅が好きな様で、若菜もご多分に漏れず隅が好きだ。

出来る事なら壁にぴったりと体を付けて、寄り掛かりたくなる。

さすがに40歳の良識ある女性としては、そういっただらしない姿勢は出来ないのだが。

店員が、お絞りとメニューを持ってやってきた。

「後で連れが来ますから、取りあえずビールと枝豆をお願いします」
若菜はいつも、同じ台詞を言う。

連れがいる。

この言葉が大事なのだ。

中年の女が一人で居酒屋に来て飲むのは侘し過ぎる。

しばらくすると、ビールと枝豆がテーブルに置かれた。

心の中で、今日の自分に乾杯しながらビールを口にする。

思わず「上手い！」と叫びたくなるのを、ぐっと堪えた。

ケイタイを操りながら、ビールを口にしてしていると未来が現れた。

「ごめんね、営業所に帰ったら、所長に捕まっちゃってさ」

「何だって？」

「大した事じゃないわ。愚痴みたいなものね。売り上げがどうのつて、右から左だから」

そう言って笑った。

「未来は今月ノルマ達成してるんだよね」

「お陰様で、達成しました」

そういうと、店員を見つけて「ビールくださいーい！」と叫んでいる。

どちらかと言えば、店員より声が大きい。

待つ事も無く、ビールが未来の前に置かれた。

二人で乾杯すると、一気に飲み干す。

「相変わらず良い飲みっぷりね」

「飲むのだけが楽しみですから」

そうは言うものの、未来にだって彼氏がいるのだ。

それも、付き合って5年にもなる。

そろそろ、結婚の話も出ているとも聞いている。

「さて、何を頼もうか」

未来がメニューに視線を落として、指で指す。

「これと、これと、これと、これ！で、どう？」

いつものやり方だ。

つまみに関しては、未来の好きなものをチョイスする。

そして最後に「どう？」と聞いてくるのだ。

若菜は、未来のこのやり方が好きだ。

自分で頼もうとすると、あれも食べたいけど、これもいいなと迷ってしまう。

未来のように、完結にこれにしよう決めてもらった方が、面倒が無くて良いのだ。

「いいよ」

「じゃ、決まりね」

店員を大声で呼び、注文をする。

「それと、ビールね。一番最初に持って来てよねえ」

店員が笑顔で、分かってますと言いたげに頷いて踵を返した。厨房に向かって、オーダーを伝えている声が聞こえてくる。

「で、次はいつ会うの？」

唐突な質問だが、それが浩二の事だという事は聞かなくても分かる。

「今度の日曜日」

「へえ、2日後にはデートかあ」

ビールが未来の前に置かれる。

「私もビールお替わりね」

若菜も負けじと、ビールを注文する。

徐々に店の中が賑やかになってきた。

「それにしても、凄いよね。18年ぶりに出会うなんて、ドラマじゃない」

「うふふ」

「気持ち悪いから」

「だって」

「分かるけどね」

ビールと料理がテーブルに置かれ、若菜がビールに口をつける。テーブルの向こうに居るのが、未来ではなく浩二だったら。そんな想いが湧いてくる。

未来には申し訳ないと思いがながらも、消せない想い。

「その彼氏と出会う為に、ずっと他の男を遠ざけていたなんて。事実は小説より奇なりって言うけど、本当だねえ」

「まさか、彼と再会する為に断ってきた訳じゃないと思うんだけど」
そうは言っても若菜自身、浩二との再会が全ての様な気がしてならない。

「いやいや、きっと彼との再会の為よ！」

そう言いながら、更にビールのお替りだ。

勿論、若菜も負けてはいない。

今まで何度も未来は若菜に、男友達を紹介して来ているのだ。

しかし何度紹介しても、誰を紹介しても若菜の意に染まる人はいなかった。

どうして若菜は誰とも付き合おうとしないのか、不思議に思っていたのだが、これで納得が出来たと喜んでくれるのだった。

徐々に店内の喧騒が大きくなり、二人もアルコールが回り出すと周囲をはばかりる事を忘れ、声が大きくなる。

店員がビールを手に駆け回っている。

あちこちから話し声が聞こえ、大笑いが聞こえて来る。

酷いになると、歌い出す者まで出て、店員からたしなめられるといった状況まで起こるのだ。

それでも誰もが楽しく語らい、日頃の鬱憤を晴らすべく騒ぐ。

若菜と未来も同様に酔いに任せていた。

若菜の大恋愛に、祝杯を挙げようと始まった酒宴も、結局零時を回る頃には、お互いの仕事の愚痴大会に変わっていたのだが。

愚痴が愚痴を呼び、アルコールが体中を駆け回る。

意識も朦朧となりだした頃、お開きとなった。

第六話 居酒屋（後書き）

恋をすると惚気たくなるものですね。

さて、この先はどうなるのか？

次回をお楽しみに^^

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^^ ）
【ポチッ】とお
願いします

第七話 デートの朝

翌日は酷い二日酔いに苦しんだが、日曜にはアルコールも抜け、体調も良かった。

前日の夜は、デートに備えて早く寝たおかげで、顔がむくむ事も無く、化粧の乗りも良かった。

散々迷った拳句に選んだ洋服は、少しでも若く見せようと、Gパンと七部袖のティシャツにチュニックと決めた。

腕には、幾つものハートが揺れる金のブレスレット。

胸元にも同じハートをあしらった、真珠がアクセントのペンダント。

口紅は、春をイメージして淡いピンクに朱を重ねた。

鏡に自分の姿を映し、

「若作りし過ぎかなあ」

と、悩むものの始めてのデートだ。

いくら昔の恋人とはいえ、洗いざらしの洋服で行く訳にはいかな
い。

「いいや、浩二ならきつと可愛いつてってくれるわよ！」

鏡に映る自分は40歳の年齢を隠せないが、浩二を想い描く自分は、大学時代へと飛んでいる。

そこにいるのは、若く輝く20代の若菜だ。

時計を見ると、約束の時間が近づいていた。

「さて、出かけようか」

バックを持って、玄関へと進む。

気分は上々。

まるで、この世の春が一度に來た様な気持ちだ。

普段は余り履かないパンプスを出して、足を入れる。

「完璧！」

どうしてこんなに浮かれるのか自分でも不思議でならない。

いつもなら、せつかくの休日なのだから、ゆっくり寝て遅いブランチを摂るのが常だ。

シヨッピングも映画も何もしたくない。

とにかく疲れを取る事、それだけに時間が費やされる。

しかし、今日の若菜は違っていた。

早くに目が覚め、念入りに化粧をし、早く時計が進む事ばかりを願っていたのだ。

まるで少女の様に心が弾んでいるのだった。

待ち合わせ場所に辿り着くと、真っ赤なスポーツカーが止まっていた。

（誰が乗るんだろうね、あんなド派手な車）

どうみても若い子が乗らないと様になりそうも無い。

若菜は、遠巻きに車を眺めなら通り過ぎようとした。

「若菜！」

どこからか、浩二の声が聞こえてくる。

辺りを見回すが姿が見えない。

「こっちだよ」

まさかと思いながら車に目を向けると、サングラスを掛けてはいるが確かに浩二が乗っている。

（え！・・・ちよっと、趣味が・・・）

そう思いながらも近づいていくと、浩二が嬉しそうに車から出てきた。

「どうだい？若菜、学生時代に真っ赤なスポーツカーに乗りたいたって言ってただろ」

確かに、学生の頃は赤いスポーツカーというのが流行っていた。

しかし浩二は、借金は作っても車を買う金は無かった。

結局古びたアパートの壁に、スポーツカーの写真を切り抜いて貼り、

「いつか、これに乗ろう！」

と夢を見るに留まったのだ。

その夢は結局果たされる事は無かったのだが。

浩二は楽しそうに笑いながら若菜を見ている。

（ここで本音を言ったら、せつかくの浩二の気持ちが無駄になるわね）

「ほら若菜、君の夢を僕は実現したんだよ」

（今更実現されても・・・）

「ええ、ステキね。でも、どうしたの？」

「買ったんだ、と言いたい処だけだね。本当は今日だけの借り物さ」（良かった）

「そう、今日の為にわざわざ借りてきてくれたのね、ありがとう浩二」

二人は車に乗り込むと、浩二がセルを回す。

滑り出すように、車が動き出す。

「今日はどこへ行く？」

「そうね・・・」

どこへ行くかと聞かれると、思い浮かぶ所が無い。

映画？

デイズニールランド？

海？

どれも違うような気がするのだ。

「行きたい所が無いなら、俺に任せてくれるかな」

「ええ、いいけど」

「若菜に、是非見せたい場所があるんだ。ちょっと遠いけどいいかな」

「見せたいって？」

「着いてからのお楽しみだよ」

車が静かにスピードを上げていく。

車内には、静かな音楽が流れている。

「この曲は若菜に似合うと思ってね」

と浩二が言う。

「今日は一段と可愛いね。学生時代と変わらないよ」

と、若菜が喜ぶ言葉を並べる。

次々に飛び出す、浩二の言葉は心地良く響き、若菜を夢の世界へと誘っていった。

第七話 デートの朝（後書き）

いくつになっても可愛いと言われたいのが女心ですねゝ^^ゝ；
さて、デートを楽しんでいる二人に何が起こるのか、次回をお楽しみに。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお
願います

第八話 プロポーズ

車が高速道路へ入ると、猛スピードで景色が流れて行く。

楽しい会話が間断無く続く。

若菜を飽きさせない浩二の話術。

（昔はこんなに楽しい人じゃなかった）

セピアカラーの記憶が蘇る。

アパートでTVを見ていた夜、どっちが好きなチャンネルを取るかで揉めた。

浩二が負ければ不貞腐れて口を利かなくなった。

そうだった浩二の態度が面倒で、負けた振りをしたものだった。

負けてあげれば、どんなもんだと言いたげに、嬉しそうにTVを見てはしゃいでいた。

二人きりの時間を楽しむ事のできる人ではなかったのだ。

しかし、あれから18年だ。

18年の歳月が、浩二を大人の男へと変化させた。

今、若菜の隣でハンドルを握り、巧みな話術で時間の経つのを忘れさせてくれている。

（この人と、ずっと一緒にいられたら幸せだろうな）

（結婚したい。もう、40歳だもの）

景色が変わり、目の前に山々の連なりが広がった。

「ステキね。山なんて久しぶりに見る景色だわ」

いつも、街中で靴をすり減らして歩き回っているのだ。

緑と言っても、街路樹が目に入るくらいなもので、自然と言える様な景色を目にしたのは本当に久しぶりだった。

「良かった。こんな田舎まで連れてきちゃって、怒られたらどうしようかと心配だったんだ」

「浩二が連れて来てくれたんだもの、怒らないわよ」

「若い頃だったら、こんな景色よりネオンがキラキラしてる方が楽しかったよな」

「そうね、あの頃は一体なんだったのかしらね」

若い頃……。

あの頃は、ディスコに行つて踊つたものだった。

暇つぶしといえば、ゲームセンターだった。

昼間遊ぶよりは夜のネオンが楽しかった。

とはいえ、お金が無い時代の若菜には、そんな遊びすら夢の様なひと時だったのだ。

「今じゃ、夜な夜な遊びに行くなんてとんでもないけどな」

「そうね、考えられないわ。疲れちゃって」

「若菜は、休みの日は何してるんだい」

「そうねえ……」

寝てるというのが実際の話だが、さすがに40女が何もせずに休日を過ごしているというのは、体裁が悪い。

いくら昔の彼氏でも、暴露したくない事実もあるのだ。

「掃除とか、洗濯とか……かな」

「やっぱり、女らしいなあ。昔もそうだったよな」

（そうだったかしら？）

「休日にどこかに行こうと言っても、掃除があるからって出掛けなかったよ」

浩二が、昔を懐かしむように笑う。

（あれはお金が無かったからよ）

「俺はいつも外に目が向いてたな」

（そして、私はいつも一人だった）

「ごめんな。本当に悪かった」

（え？）

「あの頃の俺は、本当に酷い奴だったよ。許してくれ」

「許すだなんて……。もう、忘れたわ」

(覚えてるけど)

高速を下り、田舎道をどこまでも走り続ける。
しばらく走ると景色は田園風景から林道へと変わった。
更に奥へと進む。

「ここって、山の中かしら？」

「そうだよ」

「熊、でないの？」

「熊？」

浩二が大笑いする。

「笑わないでよ」

「ごめん、発想が可愛かったもんだから」

「そんな・・・こんなオバサンを捕まえて」

「若菜はオバサンじゃないよ。とっても綺麗なレディだよ」

齒の浮くような台詞も、浩二が言えば様になる。

「ほら、ここだよ」

浩二の声に顔を上げると、そこは湖だった。

「降りよう」

「うん」

車から降りると、風が心地好い。

天高く伸びる木々の間から、木漏れ日が湖面に落ち、反射する。

辺りの木々が水面に写り、まるで何かの絵画の様だ。

神秘的な世界がそこに広がっていた。

若菜はあまりにも美しい自然の中で、ため息をついた。

「きれい・・・」

「そうだろう。若菜に見せたかったんだよ。こんなに美しい景色を
誰に教えたいかと考えたら、若菜しか思い浮かばなかったんだ」

胸が熱くなった。

こんなにロマンチックな場所で、これほどぴったりの台詞をもら
える女性が他にいるだろうか。

二人はしばらく湖面を眺めていた。

「もう昼だな」

ぼんやりと景色を眺めていて空腹すら気が付かずにいると、浩二が時計に目をやり、昼食の時間であることを告げた。

（そうね、これ以上のロマンスは現実にある筈ないよね）

若菜は今この瞬間に、浩二がプロポーズしてくれると最高だと考えていたのだ。

（再会したばかりで、それは無いか）

分かつてはいても、これほどの舞台が揃えば、女性としては最後の台詞が欲しいところだ。

「腹減っただろ？」

「そうね。お弁当持って来ればよかったね」

こんなステキなところに来ると分かっていたら、手作りのお弁当を用意したものをと悔しさが込み上げた。

「そう思ってたね」

浩二が悪戯っぽい顔でウインクして見せた。

車に取って返すと、中から発砲スチロールの箱を持ち出してきた。

「箱がね、いまいちだけど。まあ、中は凄いで。」

そう言いながら蓋を開けると、中から洒落たプラスチックの箱がいくつも出てきた。

浩二は用意してきた敷物を敷くと、その上にいくつもの箱を並べ、蓋を開けた。

すると、美味しそうな料理の数々が飛び出してきた。

まるで魔法のようだ。

「これ……」

「俺が作った！」

「本当?!」

それが本当なら、到底太刀打ちできない。

「嘘だよ。すぐ本気にするとこ、変わってないなあ」

「酷い！」

「ごめん、全部ちゃんとしたレストランの料理だよ。今日の為に作らせたんだ」

「えええ……高かったでしょう？」

どう見ても、数千円という値段には見えない。

「若菜が喜べば、それでいいんだよ」

笑顔がこぼれる。

「ほら、座れよ」

綺麗な自然を満喫しながら、最高の料理を食べ、ワインを飲んだ。楽しい語らいと、美しい景色。

優しい恋人と美味しい料理。

全てが融合する。

食事が終わっても、その場から離れる事なく二人は話し続けた。

二人が離れ離れになっていた18年間を埋めようとするように、お互いの空白の時間を、時には悲しみを交え、時には笑いを交えながら語り続けた。

そして、若菜が3日前の客先での話を終えた時だった。

浩二が若菜の手を握って、優しく悲しそうに呟いた。

「ごめん……そんな辛い思いをさせたのは俺だ。若菜がそんな嫌な仕事をしているなんて」

浩二の声が震えるのが分かった。

若菜は浩二を見つめた。

「若菜……結婚しよう」

「浩二……」

「もう、そんな仕事はしなくていいんだ。俺が若菜を幸せにするから。ずっと傍にいてくれ」

全ての音が消え、聞こえて来るのは夢のようなプロポーズの言葉だけだった。

ずっと待っていた、最高の舞台と最高のプロポーズ。

「若菜、『うん』と言ってくれ。離れていた18年、どれほどの日が来る事を待ち望んで来たか知れない。お願いだ、若菜」

若菜の目から、大粒の涙がこぼれた。

「ええ・・・勿論よ。私も、ずっと待っていたの、18年間。浩
二と会える日を。」

二人の唇が、ゆっくりと重なっていった。

第八話 プロポーズ（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございます。
ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお
願いします

第九話 正体

都内のRホテル、最上階。

窓からは、街のネオンを一望できる、最高級の部屋。

浩二はシャワーを浴びると、ガウンのままビールを飲んでいた。時々思い出したように肩が揺れている。

テーブルの上には二台のケイタイが置かれていた。

一台はブルー、もう一台はゴールドだ。

ゴールドのケイタイが鳴った。

浩二は通話ボタンを押した。

「よう！どうだい、景気は」

相手は、仲間の治夫だ。

「おう、まずまずだね」

「昔の彼女とはどうだよ」

「ああ、今日プロポーズをしたよ」

「なんだ、随分早いな。まだ、再会して3日だろ？」

浩二が可笑しそうに肩を揺らす。

喉の奥から、クツクツと漏れて来るのを止める事が出来ない。

「何だよ、そんなに楽しかったのか？」

「ああ、最高だったね。ちよつと、山の中の湖に連れて行って、豪華な料理を披露したら、いちころだったよ」

「じゃあ、プロポーズはOKしたのか」

「俺が、逃がすわけ無いだろ」

「そうだな、ムードの浩二といったら知らない奴はいないからな」

「女はムードだよ」

「じゃあ、今日の舞台も気障な言葉の連続か？」

「そりゃあそうさ、40女は焦ってるからな。結婚願望が強いから、舞台を整えてやれば簡単に落ちるさ。しかも、あいつのツボは心得

てるからな。いくら18年のブランクがあっても、結局は同じ女だよ」

「そうか、そいつはいいや。で？もう、頂いたのか？」

「金か？」

「いくらお前でも、金はまだ無理だろ」

「そうだな、これからゆつくりと巻き上げてやるさ」

「どの位頂くつもりなんだ？」

「一本は硬いだろう。」

浩二は指を一本立てた、それは1000万を意味している。

「40じゃ、かなり貯めてるだろうからな。面白いのを捕まえたな」

「まさかあんな所で会うとはね。これも縁だろうな」

「昔の恋人が急に現われて、優しい言葉の連射じゃ、誰でも参るか」

「俺に落とせない女はいないよ」

「悪だよな。いくら俺でも、昔の恋人には手を出せないがね」

「何を言ってるんだよ、俺達結婚詐欺師はモテナイ女に夢を与えてやってるんだ。これは慈善事業さ」

治夫が電話の向こうで大笑いをしている。

「で、その慈善事業で体の方も喜ばせてやったんだろ？」

「体か？俺はな、40過ぎの女に興味は無いんだよ。肉が垂れてる女は醜いだけだ。今日も必死に若作りしてきたけどな」

思い出すと可笑しくてたまらない。

「そんなに、可笑しな格好だったのか？」

「ああ、あれはダメダ！若作りも行き過ぎだ！」

可笑しくてたまらないという風に、大声を上げた。

「あんまり可哀想だから、ちょっとキスしてやったら、抱きついてきやがったさ」

「それでどうしたんだよ。どうせなら、昔のよしみで抱いてやれば良かったのによお」

「よせや、興味ねえぜ。俺はピチピチした肌が好きなんだ。そうだな、35までかな」

「やりもしないで、よく巻き上げるよなあ」

「テクニクだよ」

ビールを口にし、タバコを咥える。

「それじゃあもう、お前にぞっこんってことか？」

「ああ、間違いねえな」

「次は、巻き上げに掛かるのか？」

「少しずつな、ああいうのは一挙に高額を巻き上げると、後を出さなくなる」

「その辺は、ババアだけに硬いか？」

「そうだな」

ブルーのケイタイが鳴る。

ケイタイのディスプレイに目を向けると、《木崎恵美》と出ている。

「おっと、ピチピチのカモからの連絡だ、切るぞ」

「ああ、うまくやれよ。俺も次のカモを探しに行くか」

「頑張れよ」

「お互いにな」

そういうと、浩二はゴールドのケイタイを置き、ブルーのケイタイを手にした。

声のトーンをがらりと変える。

さっきまでの、皮肉な詐欺師の仮面を終い、善良な男性へと変わるのだ。

「もしもし、恵美」

「浩二。なかなか電話に出ないから、どうしたのかと思ったわ」

恵美は32歳。

独身だしだ。

「ごめんよ、シャワーを浴びていたんだ。君に会いたくて、どうしようもないよ」

「ああ、浩二私もよ」

「でも、ごめんよ。この間も言ったように、僕は今金作に忙しいく

て会ってられないんだよ。それが、どんなに辛いか……」

「その事で電話したのよ！そのお金私に出させて頂戴！」

浩二の頬が緩む。

「なんだって！とんでもない、ダメだよ！」

「いいのよ、私たちもうすぐ結婚するんですもの。浩二が苦しんでいるのに黙って見ているなんて、私はそんなに薄情な女じゃないわ」

「恵美……君は、なんて優しい女性なんだ。僕の目は間違っていないかったよ」

「だから、浩二。今から会えないかしら」

恵美の声が艶っぽく聞こえる。

会いたくて仕方がないという気持ちが、手に取るように分かる。

見事に引かかる女達。

（しばらく会わずにいれば、向こうから金を持ってやって来てくれるもんさ）

皮肉な笑いが頬を引きつらせる。

笑いを堪えるのが大変だ。

「ね！会いたいの。お金はもう用意してあるわ。このお金を貴方に渡したいのよ。そうすれば、明日には全て解決するでしょ？」

「……ああ……そうだよ。ぼくは……」

心から恵美の言葉に感謝していると言いたげに、言葉に詰まっている様に演出する。

演出。

全て、演出だ。

「浩二。私は貴方の悩みが解決できれば、それでいいのよ」

ソファにゆったりと座り直す。

「そうか、ありがとう。恵美、今すぐ会いたい」

ゆっくりと言葉を出す。

女の心に染みる様な、甘い、甘い口調、低く囁く様なトーン。

「私もよ……会……い……た……い」

「ああ、今夜はずっと、君を抱きしめていたい。いいかい？」

「嬉しいわ」

電話の向こうで、女が頬を染めている様子が、手に取る様に分かる。

こうして女達は浩二の胸の中で喚起するのだ。

（慈善事業さ。俺は立派な実業家だよ）

「すぐに行くよ。待っててくれ」

そういうと、電話を切った。

ケイタイをテーブルの上に投げ出すように置くと、大声で笑った。夜の窓に映る浩二の顔に、邪悪さが滲んで見える。

「バカな女だ！」

可笑しくて仕方が無い。

「これで300万だよ。チヨロイもんさ！」

笑いを抑えると、徐に立ち上がり、着替えを始める。

恵美お気に入り、柑橘系のコロンを点ける。

「ただ300万もらったんじゃ悪いからな。せいぜい、夢の世界へ連れてってやるさ」

ジャケットを取ると肩に掛け、ドアを開けた。

結婚詐欺師、ムードの浩二。

それが、昔の恋人……山本浩二。

第九話 正体（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお

願いします

第十話 音信不通

プロポーズから2ヶ月が過ぎようとしている。
楽しい時間は短く感じるものだ。

映画や食事、ドライブや遊園地。

浩二といれば、それだけで幸せだった。

ただ、あのキス以来何の進展も無い。

若菜はそれが不満だった。

どうしても、昔の情熱的な時期と比較してしまうのだ。

何度目かのデートでその話を匂わした事があったが、浩二はこう
言うだけだった。

「俺は昔の俺じゃない。大切な人を傷つけるような事はしたくない
んだよ」

それが浩二の優しさなのだと思えば思い込もうとしたが、あまり
にも昔と違いすぎて、多少の不満が湧いてくる。

（それにしても、キスくらい・・・）

と、思ってしまうのだ。

そんなたわいも無い不満よりも、更に大きな不安が押し寄せてき
た。

最近、連絡が取れなくなっているのだ。

電話をしても、電源が切られている。

メールをしても、返事が返って来るまでに時間が掛かる。

酷い時には翌日の夜になって、疲れ切った様な短いメールが来る
だけだった。

（どうしたんだろう？プロポーズしておいて、連絡も寄越さないな
んて・・・）

未来に相談しようとも思ったが、こんな事でいちいち相談するよ

うな歳でもない、自分に言い聞かせていた。

仕事にも身が入らなくなっている。

徐々に連絡が取れない現状にストレスを感じ出しているのだった。

客先を出て商店街を歩いている時に目にする、子連れの夫婦。

（私だって、もうすぐ結婚するのよ！）

以前は気にする事も無かった光景に、やたらと腹が立つ。

（大丈夫よ、浩二はきつと忙しいのよ！）

そんな事を考えている時、ケイタイが鳴った。

ディスプレイを見れば、浩二の名がある。

「もしもし！」

しばらくの間があり、浩二の声が聞こえてきた。

「・・・若菜」

「浩二、どうしたの？」

「ごめんよ、なかなか連絡が出来なくて」

「うん、心配したわ。どうしたの？」

「それが・・・」

どうしたのか、今までの様な快活な会話が出て来ない。

まるで奥歯に物が挟まっているかの様な、或いは喉に何かが詰ま
つてでもいる様な話し方だ。

「浩二？仕事忙しいの？それとも、何か他にあるの？」

不安がよぎる。

（もしかしたら、プロポーズを撤回するとか？他に好きな人が出来
たとかじゃないわよね？）

そうは思っても、それを口に出して聞いてしまったら、全てが事
実になりそうで怖い。

「ああ・・・仕事も忙しいけどね・・・大変な事が起きたんだよ」

「大変な事？」

「だから、しばらく会えないんだよ」

「・・・」

会えないと言われて、どう答えて良いのか迷った。

一瞬、頭の中が真っ白になった様な気がしたのだ。

「今日は、それが言いたくて電話したんだ」

「それ……どういう事……」

「……ごめんよ」

「ねえ、大変な事って一体何？」

これ以上は商店街の真ん中で話す事ではないと悟った若菜は、浩二に会いたいと痛切に思った。

「浩二、今どこ？」

「S町にいるよ」

「……ここから近いわ。すぐに会いたいわ。大変な事が貴方に起きているなら、私に手伝える事があるかもしれないでしょ。だから、今すぐ会いたいよ」

「でも、あまり時間が無いんだ」

「少しでいいの。話を聞くだけでいいのよ」

「……」

「もしかしたら、私に手伝える事があるかもしれないじゃない？」

若菜は電話を握り締めた。

その頃浩二はホテルの部屋で、のんびりと街並みを眺めながらケイタイに向かって話していた。

頬には薄っすらと皮肉な笑いを浮かべながら。

ケイタイから若菜の悲痛な叫びが聞こえてくる。

（バカな女だ。そんなに俺に会いたいのかよ）

「私は、貴方と結婚するのよ。プロポーズしてくれたじゃない？それとも、後悔しているの？」

「後悔だって？！とんでもないよ若菜。俺は、若菜と出会えてどれほど幸せだと思っているか……。君に教えてあげたい位だよ」

（そうだよ、たっぷり教えてあげたいね）

「私だって、浩二と会えてどれほど幸せか。だからこそ、浩二の力

になりたいのよ」

「ありがとう、でも、君に迷惑は掛けられない。でも、若菜の声を聞いたなら今すぐにでも会いたくなつた」

（そうだよ、会いたいんだよ。今すぐにね）

「私がS町へ行くわ。どこに行けばいい？」

「・・・分かつたよ、会おう。そうだな、S町のホテルMで会おう。そこなら、俺もすぐに行けるから」

「ホテル・・・M・・・ね。分かつたわ、後30分くらいで行けると思うわ」

「待ってるよ」

「ええ、待っててね」

「愛してるよ、若菜」

「私もよ。じゃあ、後でね」

そう言つと通話が切れた。

喉の奥から、クツクツと笑いが込み上げてくる。

（どの女もバカだ）

（これから素晴らしいストーリーが展開するとも知らずに、夢を抱いてやってくる俺のカモ）

（いや、俺の大金を持ったお姫様）

ケイタイをベットに投げ出すと、ゴロンと横になった。

（30分か、しばらく時間があるな）

（若菜と会つても、その後を楽しみたいとは思えないからな）

ケイタイのアドレス帳を眺める。

（そうだな・・・ちよつと楽しめる相手をチョイスしておくか）

選んだのは2日程前に捕まえたばかりの、ピチピチのカモだ。

（40女にや興味はねえよ。どうせなら、若い方が楽しめるってもんさ）

浩二はケイタイ番号をクリックすると、発信ボタンを押した。

第十話 音信不通（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお

願いします

第十一話 最初の罖（1）

若菜は走り出した。

（浩二に会える！）

それだけで嬉しくてたまらない。

しかし、浩二の声は暗く沈んでいたのだ。

今にも壊れそうな浩二の心を思うと、今すぐに傍に行つて抱きしめてあげたくてたまらなくなった。そして、自分に何が出来ることが。

その想いが昔と同じだとは気づく筈も無い。

それは、浩二が多額の借金をした時だ。

あの時も浩二は暗く沈んでいた。

その浩二を助けたくて、若菜は必死になった。

その為に夜の仕事に出たのだ。

まだ若かった若菜は、夜の仕事がどういうものか漠然としか分かっていなかった。

だからこそ飛び込めたのかも知れない。

何も知らず、何も分からずに、ただ浩二を救いたい一心だった。

しかし、結果は惨憺たるものだった。

若菜が稼げば稼ぐほど、浩二は怠惰になっていったのだ。

そして、お決まりの別れ・・・。

しかしそれは全て昔の話だ。

今の若菜にとっては、浩二は昔の浩二ではないのだ。

そして、若菜も昔の様に全てを投げ打って、飛び込める程の無謀さが無い。

だからこそ、昔とは違う。

若菜は電車に飛び乗った。

いつもは速く感じる電車の動きが、どうしてこんなにもゆっくり動くのかとイライラする。

一分でも速く、一秒でも速く浩二のそばに行きたかった。

電車がS駅に到着すると、ホテルMに向かつて走った。

自分が周囲からどんな風に見られているかなど考える余裕が無かった。

遠くにホテルMの姿が目に入ると、やっと歩を緩めた。

荒い息を歩きながら整え、髪に手をやる。

髪を撫で付けながら、考えるのは浩二の事ばかりだ。

ホテルの自動ドアが開きロビーを見渡すと、大きな窓を背に浩二が立っている姿が目に入った。

浩二の胸に飛び込みたい気持ちを抑え、ゆっくりと近づく。

近づきながら、浩二の顔を確認する。

それは、暗く沈んだ表情だった。

しかし沈んだ中に若菜に会えた安堵感が漂っている様に見受けられる。

「浩二」

浩二にやっと会えた嬉しさを隠す事が出来ない。

どうしても、笑みがこぼれてしまう。

(だめよ。浩二はきつと心を痛めているのだから、ここで喜んだら

浩二の気持ちを無視してるみたいじゃない)

「若菜……。ありがとう、会いたかったよ」

浩二の手が宙を泳ぐ。

「ごめん、つい……。本当は、今すぐにも若菜を抱きしめたいんだ。でも、大事な若菜にそんな事は出来ない」

「浩二、いいのよ」

「いや、俺は昔の俺じゃないんだ」

まるで自分に言い聞かせている様な、搾り出すような言葉。

「浩二、本当に変わったのね」

二人は向かい合う様にソファ―に腰を置くと、互いに見詰め合った。

それは、中年の男女の切ない愛の形に見える。

（会いたかったよ。若菜・・・もうすぐだ。もうすぐ、お前は俺を喜ばせてくれるのさ。お前の金は俺のものだ）

浩二の心の声が聞こえたなら、若菜はどんなに激怒するだろう。

しかし、若菜には聞こえない。

「何だかやつれたみたいだけど・・・」

「そうかな？」

以前はきつちりと着こなしていたスーツも、今ではネクタイを外し、スーツのボタンを外している。

どこと無く疲れた感じが滲み出ているのだ。

「浩二・・・一体どうしたの？」

若菜は眉間にシワを寄せながらも、心配そうに聞いた。

「・・・実は・・・」

苦悩に満ちた表情。

「いや、いいんだよ。若菜の顔が見ただけで充分なんだから」

「浩二、お願い。私を信じて、浩二の為にならどんな事でも出来るわ」

浩二の顔が妙に歪んだ。

それは、苦悩とも読めるだろう。

しかし、違っていた。

（そうだな若菜。お前は俺の為なら何でもする女だったよ、昔から）

（だからこそ、愛して止まないのさ！）

二人が若かった頃の別れのきつかけとなった事件を忘れる事が出来ない。

あの時、ギャンブルに嵌ってしまい、結局気が付けば借金地獄に嵌っていた。

それも、借りていた相手がやくざだと気が付いたのは、200万

を超えた時だった。

貸す時には優しい態度を崩さなかった相手も、ある程度の金額を超えた時から、口調が変わって来た。返済を求める

ようになり、期限を越えても払う事が出来ないと、叩きのめされた。正に、血反吐を吐くというのがこういう事なのかと知った。

しかし学生の自分に返済の手立ては無かったのだ。

最初の200万が、あっという間に倍になった。

恐怖で毎日が生きた心地がなかった。

そんな時、相手は囁いた。

「彼女がいるんだろ？助けてもらえよ」

彼女に助けてもらう。

（そうだ、何も自分が痛い思いをしなくても、あいつに働いてもらえばいいんだ）

「でも、彼女のバイト位じゃ返し切れないですよ」

相手が野卑な笑いを浮かべて、こう言ったのだ。

「仕事なら、俺が紹介してやるよ。高額バイトをな」

（別に減るものじゃないんだ。構うもんか）

浩二はしっかりと頷くと相手によりしくお願いしますと、頭を下げたのだった。

第十一話 最初の罨（1）（後書き）

長らくお待たせいたしました^^；

なかなか、続きをUPできずにいましたが、やっと続きをUPできるところまで着ました。

毎回読んで下さっている皆さんには、ご迷惑をおかけいたしました。

では、この続きは又。。。。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^^ ） 【ポチッ】とお

願いします

第十二話 最初の罖(2)

(あの頃のお前は可愛かったよ。献身的で、どんな事にも耐えてくれた。おかげで借金が全て無くなったんだ)

(ただ、残念だったよ。あれきり、お前は俺に愛想をつかして出て行ってしまったんだからな)

(本当に、残念で仕方が無かったよ)

浩二が目を上げると、若菜の真剣な顔があった。

それは、若かった頃のあの顔と同じだ。

(喜ばしてくれよ、若菜)

「浩二、どんな事でも私に話して頂戴。私たち結婚するんでしょ？」

「そうだな・・・」

若菜がじつと浩二を見つめる。

例え、どんな事を言われても、「驚かないから大丈夫」とでも、言っている様な目だ。

本当は、言いたくないんだが仕方が無いという雰囲気を出しながら、浩二はゆっくりと語り出した。

「実は・・・友達が事故を起こしてね」

それは、浩二の親友とも呼べる友達が事故を起こしてしまったという内容だった。

更に、その友達が保険に加入しておらず、大金を工面せねばならい。

しかし友達はどうも失業中で、貯金を全部集めても足りない。友達の苦悩する顔を見ているのが辛くてたまらない。

「一体、いくらあつたらいいの？」

浩二は頭を振った。

「それが、言わないんだよ。自分の問題だからと言ってね」

「・・・」

「でも、俺は何とかしてやりたいんだ。少しでも・・・足しになる

か分からないが、少しでも何とかしてやりたいんだよ」

「・・・」

「それで、お金の工面をしていたの？」

「ああ、恥ずかしながらこんな歳になっても纏まった金が無いんだ。だから、あちこち金作に走っていたのさ」

「どの位、集めるつもりなの？」

「あいつもある程度は持つてると言ってたからな。俺も少しはあるし、あちこちに頼み込んで何とか形には成り出しているんだが、後200万あれば」

「200万」

「ああ、後200万あれば何とか形になるし、被害者にもそれなりの形で持つていくことが出来るだろう」

「結局、全部でいくら集めたの？」

若菜の目が光ったのを、浩二は見逃さなかった。

昔の若菜なら、金額の事を言った所でまるで分からなかっただろう。

しかし、今の若菜は保険外交員だ。

ここは、あくまでも友達同士の気持ちという、美しい話に纏めなくてはならない。

「大した額じゃない。気にしないでくれ」

「気にするなと言われても。だって、後200万って、そりゃあ損害保険だから・・・」

「若菜！君が保険の外交員だって事は分かってるよ。そういう事に詳しいのも良く分かってるんだ。だが、これは友達としての気持ちの問題だからね」

「・・・そんなに、詳しいわけじゃ・・・」

「男同士なんて、愚かな所があるものさ」

「・・・」

「金額じゃないんだよ。あいつが、落ち着いてくれればいいんだ。笑ってくれたら、それで俺はいいんだよ」

「その200万が揃わなかったらどうするの？」

「・・・後できることは、街金しかないかと思ってるよ」

「街金ですって！」

思わず声が大きくなり、辺りを見回す。

ホテルのロビーでする話ではない。

誰に聞かれているかも分からないのだ。

「ああ、借りられる所は全部借りたんだ。残っているのはその位だよ」

自嘲的に笑って見せる。

若菜はじつと浩二を見つめていた。

話している間、ただひたすら浩二の目を見つめていた。

それは恋する乙女が愛する男性を見つめるのとは違って、
【凝視】
と言った方が正確な気がする。

（くそ！昔ならとつくに陥落してるのに、何だってんだよ）

若菜の目線が浩二から外れた。

（もう一押しか？）

浩二の心が、イライラと軋み出した。

（もっと、あっさりと落ちる筈だったのに、やっぱり昔の事があるから一筋縄じゃいかねえか）

（よし、戦法を変えるか）

浩二は時計を見た。

「そういう訳なんだよ。分かっただろ？」

「ええ・・・」

「だから、しばらく会えないんだ」

「しばらくって、どの位？」

「分からないよ。街金に借りれば、それを返済しなくちゃならないだろ。ゆつくりと返済できるほど、奴らは親切じゃないからな」

「そりゃ、そうだけど。街金に手を出したら・・・」

昔の事が蘇る。

アパートに帰ると、浩二が暗い部屋で明かりも点けずに待っていた。

明かりを点けると、浩二の顔が痣だらけで、瞼は大きく腫れ上がっていた。

どうしたのかと聞くと、浩二は訥々と語り出した。

ギャンブルに嵌ってしまつて、大変な事になつてしまった。

このままでは、やくざに追いかけられる。

「俺は、殺されちゃうよ。若菜、俺、死にたくないよ」

「浩二。それは、自分達じゃどうしようもないよ。そんなお金ないよ」

「でも、俺、死にたくないよ!!」

涙ながらに訴える浩二を、若菜は何とか助けてやりたかった。

「だって、普通にバイトしてたつて、そんなの貯まらないよ」

「普通のバイトなら、貯まらないよな」

浩二の眼光がいやらしく光った。

タバコに火を点けゆっくりと煙を吐き出し、若菜の体を舐めるように上から下まで見た。

「良いバイトがあるんだよ。お前にしかできないバイトなんだ」

あの時、気づくべきだったのだ。

浩二が何を考えていたか。

しかし、若い若菜には想像出来る筈も無かった。

暗く沈んでいる浩二。

死にたくないと言き叫ぶ浩二。

助けたいと思っただけだった。

「私にしか出来ないバイト?」

「ああ、若菜じゃなくちゃだめなんだよ。俺じゃ、金にならないんだ。」

「そんな、良いバイトがあるなら・・・」

「俺の為に、ちょっとだけ頑張ってくれればいいんだ」

「浩二の為に?」

「ああ、俺の為にだよ。若菜・・・愛してるから、助けてくれよ」
「うん・・・私も、愛してるよ。浩二の為に成るなら、助けられるなら、頑張るよ」

（確かに、あのバイトのお陰で浩二の借金は無くなったよね）

（でも、私は計り知れない苦痛を強いられたわ）

（だけど・・・だけど、今の浩二は、あの時の浩二とは違っわ）

（この人の目に嘘は無い！）

（街金なんかに出したら、助けられなくなる）

（助けるなら、今しかない！）

若菜は硬く手を握ると、浩二に向き直った。

「そのお金、私が出すわ！」

浩二の目が鋭く光った事に、気がつく者は誰も居なかった。

第十二話 最初の罖(2) (後書き)

最後まで読んでくださってありがとうございます。

とうとう、自分からお金を出すって言うちゃいましたね。><
若菜はこの先どうなるのでしょうか。。。><

次回をお楽しみに^^

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は(^^) 【ポチッ】とお
願いします

第十三話 入金

そろそろマンションを購入しようかと、貯めて来たお金がある。若菜は、通帳を睨みながら「200万位なら、大丈夫よね」と自分言い聞かせていた。

通帳から浩二の口座へと送金する。

簡単な作業だ。

出来る事なら、会って渡したかったがこの先会う暇が無いと言う。あちこちに借金をしてしまったので、とにかく早くに返済をしないとならない。

その為、仕事量も増やさなくてはならず、毎日が泥のように眠るだけなのだと、若菜に説明したのだった。

「だから、これからはなかなか会えないんだ」

浩二は、切なそうに若菜を見つめた。

「でも、返済が終われば、すぐにでも結婚できるからね」

ならば、その返済分も若菜が出そうかとも思ったのだが、浩二は許さなかった。

「いくらなんでも、俺も男だよ。昔とは違うんだ。俺にもプライドがある」

そういつて、寂しそうに笑ったのだった。

疲れているのが、手に取るように分かった。

そんなに大変なら、助けてあげたい。

しかし、浩二のプライドと言う言葉に、胸を熱くしたのだった。昔を知らなかったら、そんなバカなプライドと笑ったかもしれない。

しかし、昔の浩二を知っているからこそ、今は黙っていようと口を閉ざしたのだった。

「又、貯めればいい事なものね」

銀行を出ると、浩二へと電話をするが、仕事が忙しいのか浩二が

電話に出る事は無かった。

「しょうがないよ。借金を自分で返すって言ってるんだもの。昔とは違うんだから。きつと、一生懸命頑張ってるんだよ」

ブルーのケイタイが鳴った。

ディスプレイには【若菜】とある。

浩二は閑静な住宅街の公園で、ケイタイを手にしていた。

「若菜か・・・」

暫く放っておくと、メッセージが入った。

《浩二？仕事なのかな？お金振り込んだよ。仕事頑張ってね。・・・どうしても、どうしても無理だと思ったら、いつでも言ってね。私で出きる事なら、いつでも手伝うからね》

浩二の顔が歪む。

《会えないの・・・寂しいけど。頑張ってね》

喉の奥がクククと震えた。

可笑しさが込み上げてくる。

「本当にバカな女だな。昔も今も」

「騙されているとも知らずに、自分から金を出すとは」

「いや、俺が上手いのか？」

「そうだな、俺はもてない女に夢を与えるのが上手いのだ！」

ベンチに座りながら、周囲に目をやり、木々の揺らぎを見つめていると、昔の事が蘇ってくる。

若菜と同姓していた頃、貧乏学生だった。

それでも、遊びたくて仕方が無かった。

バイトで、キャバレーのボーイをした事があった。

あの手の女達を垂らしこむのは、簡単だった。

いくらでも、貢いでくれたものだ。

その現実を若菜は知らないのだ。

（まあ、知ってたらもっと早くに別れてただろうがな）

（さて、次はいつ頃にするかだな）

浩二は、競馬新聞を眺めながら思案していた。

（若菜の性格からだ、二ヶ月くらいか、いや、三ヶ月位は頑張った振りが必要な。）

（あんまり、間を空けてもなあ）

（たまには、会ってやらないと。小遣いも欲しいしなあ）

新聞を畳み、大きく伸びをする。

それにしても天気が良い。

風が気持ちよく、頬に当たる。

自然は平等に癒してくれるものだ。

（どれ、巻き上げた金で遊びにでも行くかな）

浩二はベンチから立ち上がった。

遊びがてら、次の獲物を物色するのだ。

（ビジネスを忘れちゃあ、いけねえやな）

スーツのジャケットを肩に掛け、歩き出した。

風が小さな渦を巻いて、舞い上がった。

第十三話 入金（後書き）

長らくお待たせいたしました。
やっそこさの更新です^^;

200万円ものお金を入金してしまった若菜。相手の畏とも知らず
にはまっていつてしまつて。。。
どうするんでしょうねえ。

さて、次回をお楽しみに。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^^ ） 【ポチッ】とお

願いします

第十四話 夢想

毎日が辛い。

仕事は何とか順調にこなしている。

足を使って、毎日顧客回りをし、飛び込みもしている。

新規獲得までは時間が掛かるが、地道な活動が実を結びそうな気配もある。

最近、同僚から「綺麗になった」と賛辞を受ける事もある。
波風の無い毎日。

それでも、辛い。

以前なら、仕事が終わって帰宅する、それだけの生活でも何の苦もなかった。

それが、浩二と会えなくなった今が辛いのだ。

どんなに会いたいか。

どんなに会いたいと電話したいか。

毎日毎晩ケイタイを眺めてはアドレス帳を開く。

浩二の番号をディスプレイに表示させて、センターボタンを押せば済む事なのだが、それはしてはいけない事。

今の浩二は、仕事で忙しいのだ。

借金を返す。

それだけの為に。

いや、そうではない。

借金を返した暁には、きっと自分を迎えに来てくれる。
次は、結婚式だ。

夢にまで現れる、結婚式。

浩二と自分。

真っ白なウェディングドレス。

白いタキシードの浩二。

神父様の穏やかな、澄んだ声。

ステンドグラスから射す、日の光。

誰を呼ぼうか。

両親。

心友の未来。

会社の仲間。

みんな驚くだろう。

しかし、夢から覚めれば一人だ。

隣にいるはずの浩二はいない。

会いたさが募るのだ。

「浩二はいつまで頑張るんだろう」

カレンダーに目をやると、再会の日から、5ヶ月が過ぎている。

会わなくなってから、3ヶ月が過ぎようとしている。

夜の風が温かく感じたあの頃が、今では長袖でちょうどよい気候だ。

夏も終わり、秋から冬へと木々が化粧直しを始めている。

木枯らしが吹くのも間もなくだろう。

ため息が出る。

「もうすぐ、41歳の誕生日だよ。」

40歳のウェディングドレスと、41歳のウェディングドレス。

大した違いは無い様に思うだろうが、本人にとっては大きな違いだ。

「もういいよ、浩二」

「もう、いいから・・・お金は、私が返すから・・・お願い、電話してきて!」

涙が頬を伝う。

せつかくの休日に、一人薄暗い部屋のベッドの中で、泣いている自分が哀れでならない。

気持ちを切り替えてカーテンを開ければ、朝の陽射しが入ってくるのだが、それすら億劫でならない。

只々、涙が流れるに任せるしかないのだ。

「いつになったら、結婚式を挙げられるんだろう」

「本当に待ってたら・・・待ってるだけでいいの？」

そっとケイタイを手にする。

すると、待っていた様にケイタイが鳴った。

浩二専用に登録した曲だ。

余りのタイミングの良さにケイタイを落としそうになりながらも、受話ボタンを押した。

「もしもし・・・」

恐る恐る、声を出す。

本当に浩二なの？

そう聞きたいのを堪えた。

「若菜？」

その声は、確かに浩二だった。

しかし、とても疲れた声で、暗く沈んで聞こえた。

「浩二、可哀想に・・・そんなに疲れて」

「ごめん・・・毎晩、深夜まで仕事してるから。寝る時間が、ほとんど無くてね」

「それで、返済は・・・どうなの？」

「それが・・・申し訳ない」

「・・・」

「どんなに頑張っても、限界があるね」

自嘲気味に笑っているのが分かる。

「当たり前じゃない。でも、相手は待ってくれるんでしょ？」

「待つてはくれるだろうけど、俺が嫌なんだよ。相手にも、家族が

いるしね」

「そうね」

「もう、どうしようもないなって・・・思ってたね」

（そうだよ、どうしようもないのさ）

浩二の心が騒ぐ。

（ここまで待たせたのは、お前がどうしようもないほど辛くなるのを待ってたんだよ）

「会いたいよ」

（そうだろうさ。）

「会いたいよ、俺だって会いたい。でも、会えば気持ちが揺らぐ」

「もういいよ。もう、充分だよ、浩二」

「・・・」

「昔の事を気にしてるんでしょ？」

「・・・そうだな、それもあるかもしれないね」

「浩二の気持ちは分かったから。浩二が昔と違うのも、良く分かったから」

「若菜・・・」

「だから、もう・・・お金の心配はしなくていいから」

「しかし・・・」

「浩二、いくらあればいいの？」

「・・・だめだよ・・・若菜」

「いいのよ、私は浩二と結婚するんだもの。私のお金は、浩二の物よ」

（そうだよ、俺のものだ！）

「・・・若菜・・・スマン」

「いくら？」

「500万だ」

笑いを押し殺すのに苦労する。

「500万・・・分かったわ。用意するから、どこで会える？」

最早、その金額が異常な金額である事にすら、考えが及ばなくな

っているのだ。

（この時を待ってたんだよ）

日時を決め、電話を切った。

500万。

冷静に考える事が出来たなら、事故後の保障金額を友達の浩二が融通する金額でない事は、分かったであろう。

しかし、今の若菜には考える事が出来ないのだった。

ベットから出ると、服装を整えた。

キャッシュコーナーで下ろすには、限度額がある。

それだけの額を揃えるには、平日でなくてはならないのだ。

だから、約束は平日の夜という事になったのだが。

それでも、もうベットでめそめそと泣いている気分ではなくなっていた。

浩二からのたった1本の電話で、全てが好転したように若菜は気分が良かった。

カーテンを開け、日の光を部屋に入れ、窓を全開にした。

これから新しい未来が待っているのだと、気分が晴れ渡っていた。

第十四話 夢想（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは来週更新します。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）
【ポチッ】とお
願いします

第十五話 恋は盲目

晴れやかな気分の中、未来から連絡があった。

「若菜、何してる？」

相変わらず、テンションが高い。

元気な弾んだ声だ。

最近では未来の元気な声でさえ、若菜を元気付ける事が出来なかったのだ。

「掃除して、洗濯して、布団干して、休日をエンジョイしてるわよ！」

元気な、明るい声が返って来て、未来も多少困惑したのだが、そんな気持ちを悟られる事も無く話が続いた。

「ここのところ落ちてる感じだったけど、今日は機嫌が良いのね」

「そうね、とつても晴れやかよ！」

「そう、よかったあ」

「何で？」

ケイタイを耳に当てながら、カーペットにコロコロと粘着テープを転がしている。

最近では、こんな事すらやりたいと思わない日が続いていたのだ。

「だって、気分が塞いでるって感じがもの凄くしたからさあ。新規が取れて無いからなのかなあって、結構心配してたんだよ」

まさか、恋愛が原因だとは思っていない様子だ。

「あはは・・・新規かあ。そういえば、取れてないわね」

「滅茶苦茶明るいわね。ちょっと、明るすぎて付いて行けないんですけど」

「ごめん、ごめん」

「どうしたのよ」

「それは・・・」

（どうしようか。未来になら、言ってもいいよね）

(でも、電話じゃなあ)

どうせなら、思いっきり惚氣たい。

それが女心だ。

「こつちに来る？」

「若菜の家？」

「そう！久しぶりにホームパーティーしようよ」

「いいねー。じゃあ、彼も呼んだら？」

「彼？」

「昔の恋人、今の彼」

「ああ、浩二ね」

若菜が可笑しそうに笑う。

「浩二は忙しいから無理だわ」

「そうか、じゃ、女二人で寂しく楽しむか」

お互いに笑って電話が切れた。

「じゃあ、久しぶりに料理でもしようかな」

若菜は鼻歌交じりで台所へと向かった。

今夜の楽しいパーティの準備だ。

夕闇が迫る頃未来がやって来た。

手には大きなビニール袋を三つもぶら下げている。

「いらっしやあい」

「重かったわよお」

部屋に入り袋を開けると、中からビールや乾き物が次々に出てくる。

「漬物も買ってきたよ」

ナスやきゅうりの漬物がテーブルの上に並ぶ。

「私も久しぶりに作りましたよ」

「おお！豪華な料理の数々！」

台所から運ばれて来る料理は、湯氣を立てて、美味しそうに皿に盛られている。

「こんなに食べ切れないね」

「気分が良いから、たくさん作っちゃったんだよね」

テーブルに着き、お互いビールのプルタブを押し開ける。

「では、元気になった若菜の為に、カンパニー！」

「ありがとう！」

缶ビールがカチつと音を立ててぶつかり、同時に口をつけた。

「さて、どうして元気になったのか教えて欲しいな」

箸を持ち料理を摘み上げながら、未来が話を促した。

「うふふ・・・」

「気持ち悪いわねえ。40女の含み笑い」

「未来だって、後5年もすれば同じじゃない」

普通の友達関係なら、年齢の事を言われれば多少なりとも面白くは無いものだが、この二人にはそんな気遣いは無いのだ。

「後5年もあるよ」

「あつという間の5年だよ」

「で、どうして？」

あつという間に、ビールが1本空になる。

二本目のプルタブを押し開けながら、未来が促す。

「それがね・・・彼から連絡が来たのよ」

「彼って、例の？昔の恋人？」

「そうよ」

「連絡が来たって・・・ずっと、付き合ってたんでしょ？」

若菜は、又含み笑いをすると、ゆつくりと事の顛末を話し出した。話していくうちに、未来の顔が曇ってくるが若菜には分からないのだ。

今の若菜は自分の幸せしか見えていない。

恋とは、とかく盲目なものだ。

「だから、今回も返済のお金を出すんだけど、これが片付いたら、いよいよ結婚に向けての準備が始まるのよ」

嬉しそくに話している。

しかし、どうしても未来には腑に落ちない。

最初が200万。

次が500万。

いくら結婚するからといって、それを出してくれと言うのも可笑しな話だ。

しかし、今の若菜にそんな疑問をぶつけた所でどうなるだろう。怒り狂って浩二を弁護するか、友達の縁を切ると言い出すかだ。人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られて死んでしまえと、昔の人は言ったものだ。

（今は黙ってるしかないか？）

（でもこのままじゃ、みすみす500万を渡す事になる）

（盲目になると人の話が聞こえなくなるのは誰でも同じだしなあ）
（どうしたらいい？どうしたら・・・）

若菜の嬉しそうな顔を見ていると、水を差すのも辛い。

しかし、どうしても納得がいかないのだ。

「ねえ、若菜あ」

未来は、意を決したように若菜を呼んだ。

「なにい？なあんか、真面目えな顔おしてえ」

「その話だけどさあ」

「なんの話よあ」

「500万だよあ」

「ああー、浩二に渡すう？」

テーブルに、頭を載せて、かなり酔っている若菜に更に続けた。

「それ・・・騙されてない？」

「・・・うん・・・」

しかし、若菜の意識は夢の世界へと飛んだ後だった。

「若菜あ。騙されてるんじゃないのお？」

何度若菜の体を揺り動かしても、起きる気配が無い。

未来は思案に暮れながら、9本目のビールを煽ると握り潰したのだった。

第十五話 恋は盲目（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは、又来週更新します。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）
【ポチッ】とお
願いします

第十六話 ウェディングへの一歩

休日が明け、朝一番に銀行へと急ぎ、500万を下ろした。通帳が大分寂しくなったが、それでも若菜は幸せだった。

銀行では、500万という纏まった額を下ろす事で多少面倒だったが、それでも全額が若菜の手に渡された。

若菜は大事そうに、バックに終うと銀行を後にした。

銀行から出ると、浩二のケイタイへメールをする。

《お金の準備が出来たわ》

即座に返信が返って来た。

《時間が出来たから、すぐにでも会えるけど、若菜はどうか？》
嬉しかった。

すぐにでも会いたかったのだ。

しかし、今から客先へ行く仕事がある。

（どうしよう・・・でも、会いたいし）

（お客さんには、予定を変えてもらおう）

《大丈夫。今すぐでも会いたいわ》

浩二から再び連絡が来る。

《Kビルの地下にある、ポプリという店で会おう》

《分かったわ。すぐに行くから》

《ああ、待ってるからね》

メールを終えると、すぐさま客先の電話番号に掛ける。

数回のコールの後、相手が出た。

相手はマンションに暮らす夫婦だ。

今日の約束が明日に伸びた所で、大した支障があるとも思えない。案の定、相手は快く了承してくれた。

「申し訳ありません」

と、何度も営業用の詫び台詞を繰り返し、若菜は電話を切った。

Kビルに着き、地下に下りる。

朝も早い時間だというのに、人でごった返していて歩き辛いが、歩く事に慣れているので、苦にはならない。

しかし、歩く事は大した事ではないのだが、気持ち之急ぐ。

その為、自分の前に人がいる事で、どうしても苛立ってしまう。

（こんな事でイラ付いてたら、良い奥さんになれないわね）

（でも、今日は仕方ないよ。だって、久しぶりに浩二に会えるんだもの）

足がひとりでに速くなる。

人を縫うように進み、やっと《ポプリ》に着いた。

店の前は綺麗に掃除がなされていた。

小さな黒板が看板の代わりなのか、店の名前とお勧めメニューが書かれている。

黒板の周りには、造花があしらわれ可愛らしさをかもし出していた。

それはまるで、若菜と浩二のこれからを祝福する、小さな入り口に見えた。

若菜は、店のドアをそつと押し開けた。

ドアに付いているベルが涼やかに響く。

店内には数人の客がいるだけで、音と言えば小さな音でクラッシュクが流れている程度だ。

カウンターの傍には、ウエイトレスが所在無げにナプキンを折りたたんでいる。

若菜に気が付き「いらっしやいませ」と儀礼的な言葉を発した。

「待ち合わせなんですが・・・」

ウエイトレスに言いながら店内を見回すと、店の奥のテーブルに浩二が座っているのが見えた。

「あ、彼です。ありがとう」

穏やかな笑顔をウエイトレスに向け、浩二の方へと歩き出す。

若菜がテーブルに着くと、浩二が優しく迎えてくれた。

すると、即座にウエイトレスが水とお絞りを持ってやって来た。

若菜はそつと笑顔を向けると。

「コーヒーを」

と一言伝えた。

コーヒーが来るまでの間、互いを労わり合う優しい眼差しが交わされていた。

若菜は浩二の疲れ切った様な姿が、辛く哀しかった。

その姿に涙が出そうになったが、じつと耐えた。

ここで涙を流しては、まるで浩二が若菜を泣かせている様に見える。

それは、相手を思いやれる年齢の若菜には、してはならない事なのだ。

それでも、胸が熱くなり言葉が出て来ない。

コーヒーがテーブルに置かれウエイトレスが下がると、ようやく浩二が口火を切った。

「スマナイ」

疲れきった姿。

再会した時はスーツをビシツと着こなし、一つの隙も感じられなかったのに、それが今はどうだ。

若菜は、何を話して良いのかさえ分からなくなっていた。
会えない時間が長すぎたのだ。

もし、自分が傍に居たなら、こんなに疲れ切った姿になっている筈が無いのだ。

「浩二、ごめんね」

「どうして若菜が謝るんだ」

「だって・・・私が、傍にいてあげてたら・・・そんなに・・・」
言葉が詰まる。

泣きたいのを堪えて話をする事が、これほど辛いとは知らなかった。

「若菜のせいじゃないよ。俺が悪いんだ。それなのに、今度も若菜に迷惑を掛けちゃうね」

浩二のその言葉で、自分が何をしに来たのかを思い出した。

余りにも会えなかった時間が長すぎたので、会った瞬間に全てが忘れ去られてしまったのだ。

若菜はバックから500万の入った封筒を出すと、浩二の前に置いた。

「これ・・・500万入ってます」

声が小さくなる。

「これで、全て終わるのよね」

浩二は封筒を手にとると、無造作にバックへ入れた。

「ああ、これで全てが終わるんだよ。次は結婚式だ」

「良かった・・・」

「そうだな。コーヒーが冷めるぞ、飲んじゃえよ」

金を手にした瞬間に、浩二に安堵感が漂い、言葉が存在になってしまったのだが、若菜は気が付いていない様だ。

「うん・・・」

ほっとしたように、コーヒーに手を伸ばして口にする。

それを見て、浩二もほっとしていた。

（いけねえ、つい地が出ちゃった！）

「じゃあ、俺行くから」

浩二が立ち上がった。

若菜がコーヒークップをテーブルに置きながら、浩二を見上げた。

それは、「え？どうして？これだけなの？」と言っている様に見える。

「若菜、この金を友達に返さなくちゃならない。それも、早急にな」

「あ・・・ええ、そうね」

「だから、今日はゆっくりは出来ないんだよ。」めよ

「いいのよ、早く返した方がいいわ」

「次は、式場を決めに行こう」

式場という魔法の言葉に、若菜の心が躍った。

「そうね、そうしましょう!」

「じゃ、又な」

「待って!今度はいつ?」

「・・・」

浩二の顔が曇る。

(面倒臭せえなあ。こいつ、こんなに面倒な女だったか?昔は都合のいい女だったがな)

浩二が若菜の椅子の背もたれに手を置き、顔を近づけた。

「又、電話するよ」

そついうと、軽く唇にキスをした。

「だめよ、人が見てるわ」

嬉しい気持ちを抱きながらも、拒んでみせる。

出きる事ならこのまま一緒に居たい。

「じゃ、そついう事で」

浩二が軽い足取りで、店を出て行った。

ウェイトレスの投げやりな言葉が浩二を追いかける。

「ありがとうございましたあ」

若菜は頬を両手で覆いながら、一人口元が緩むに任せていた。

テーブルには、二人分の伝票が残っていた。

第十六話 ウェディングへの一歩（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）
【ポチッ】とお
願いします

第十七話 ウエディングドレス

数週間後、式場を選ぼうと浩二から連絡があった。

「友人の紹介で、良い式場があるそうなんだよ」

浩二は予め用意していたパンフレットを若菜に見せた。

枯葉が足元を舞う公園のベンチで、若菜はそれをゆっくりと眺め始めた。

真っ白な建物。

広いロビー。

大きなプール。

真っ白なウエディングドレス。

シャンパンを手にした新郎と新婦。

チャペルが併設され、バージンロードには真っ赤な絨毯が敷かれている。

夢にまで見た、バージンロードだ。

「ウエディングドレスもレンタルできるんだよ」

浩二が言う。

「ステキねえ」

「若菜だったら、シンプルなドレスの方が似合うだろうな」

「そうかしら」

「ゴンドラで登場なんてのも、あるそうだよ」

「大きなウエディングケーキね」

「そうだね」

見れば見る程、夢の世界が実現する予感が高まる。

（もうすぐなのね）

浩二を見れば数週間前の疲れ切った様子とは打って変わって、はつらつとしている。

全てが解決し、全てが順調に流れ出していると感じさせる笑顔。

「幸せだわ・・・」

思わず口から漏れる言葉だ。

「ああ、俺もやっと幸せになれる」

（いや、もっと幸せになれるよ、俺は）

「ここでいいわ。見に行きましょうよ」

若菜の目が笑っている。

もう、何者にも邪魔されないと自信と、安心。

これからの幸せしか思い描けない、心。

「そうだな・・・見に行くか」

（どうせ式なんて挙げないけどな）

「新婚旅行はどこへ行く？」

更に話が広がる。

「新婚旅行か、考えてなかったな」

（そこまで、考えるかよ。馬鹿馬鹿しい！）

「嫌ねえ、新婚旅行を考えてなかったなんて」

若菜が可笑しそうに、くすくすと笑う。

「でも、俺は金がないからな」

「大丈夫よ、私の貯金があるわ」

「それはダメだよ。式の金も若菜が出すしかないんだから、その上新婚旅行もなんて」

「いいのよ。だって、一生に一度なのよ。私が行きたいんだから」

「こりゃあ、頭が上がらなくなりそうだな」

「そんな事ないわ。大事な旦那様よ」

目を合わせては、笑う。

しかし、その笑いの意味がお互い違う事を知っているのは、浩二だけなのだ。

（式の金も旅行の金も全て現金で頂いてやるから、安心しろよ）

その日は、式場を見に行き旅行会社でパンフレットを貰って終わった。

若菜はそれらを大事にバックに入れながら「後で又、ゆっくり見

るわ」と笑った。

浩二はタバコに火を点けながら、横目で若菜を見た。

「ああ、俺には分からないからな。若菜が気に入ればいいよ」

そう、優しく言って返した。

（分かるうとも思わないさ）

久しぶりに二人で食事をし、少量のお酒を飲み分かれた。

家まで送ってくれるものとばかり思っていたのだが、浩二は「じゃあな」と言うなり背を向けて歩き出したのだった。

ふと、昔の事が思い出される。

仲間と飲みに行った夜。

帰ろうと言う若菜に、先に帰れと言う浩二。

他のカップル達は、どちらかが帰ると言えば必ず双方伴なって帰って行った。

例え、帰る場所が違ってても「俺が送るから」と言っていたものだ。しかし、浩二は昔からそんな事はなかった。

「そういうところは変わらないんだ」

可笑しかった。

出来れば変わって欲しい部分である筈なのに、逆に変わっていない事に安心感があるのだ。

若菜は、一人ほくそ笑みながら、浩二に背を向けて歩き出した。

「冗談じゃねえ」

浩二はブルーのケイタイを取り出すと毒づいた。

（いつまでも食えない女相手に、恋人ごっこもねえよ）
ケイタイのアドレス帳を開く。

（若菜の相手をするとかれるよな。やっぱり、変に昔を知ってるからかなあ）

浩二の指が、一つの番号を選択する。

（口直しが必要だぜ）

呼び出し音が鳴る。

（やっぱり、ピチピチとしっぱりってな）

卑猥な笑いが浮かぶ。

電話の向こうで、明るい女の声が聞こえてきた。

「会いたくなってるね」

浩二の声が優しく響く。

コートの襟を立て寒さにかじかむ手をポケットに入れる。
獲物が嬉しそうに電話の向こうで笑っているのが分かる。

（まずは体を温めて、懷も温めてもらおうか）

浩二の巧みな話術が女を誘う。

携帯からは、女の切なげな吐息が漏れ続けていた。

第十七話 ウエディングドレス（後書き）

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお

願いします

第十八話 幕開け

それから、毎日が夢の様に過ぎていった。

週末には、ドレスを見に行ったり、他の式場を見に行ったり。

引き出物はどうするか。

招待客は誰にするか。

しかし、そのほとんどが若菜一人で決めている様なものだった。

浩二は横で微笑むだけで、何も口出しをしないのだ。

興味が無いのか、はたまた、全て若菜が気に入る様にやれば良いという配慮なのか。

勿論若菜には簡単な話だ。

何をどう決めるのか、それくらいの事は今までのキャリアからすれば、なんとという事はない。

だが、結婚となると、一人で全てを決めるのは寂し過ぎる。

式場の人が、ご主人様のご意見はと水を向けても、彼女に任せてありますのでの一点張りだ。

さすがに若菜も苦言を呈した。

「自分の結婚式なのだから、少しは自分の意見も入れて欲しいわ」とすると、浩二はニツコリと笑って、こう言うのだった。

「俺は、若菜が傍に居てくれたら、それだけで充分なんだよ。全て、若菜の良い様にして欲しい」

そう言われてしまえば他に言いようがない。

結局若菜が、段取りの全てを行うというスタイルが続けられているのだった。

街がクリスマスムードで賑やかになりだした頃、結婚式の日取りが決まった。

「6月がいいな。6月の花嫁は幸せになれるって言うだろう」

浩二が始めて、結婚に関して自分の意見を言ったのだった。

その一言で、結婚式を6月に行う事になった。

若菜にしてみれば、もっと早くに式を挙げたかった。どうしても40歳の内にウエディングドレスを着たかったのだ。

それ故、一人忙しい思いをして、結婚式の段取りを付けて来たのだ。

まさか、来年になるのだったら、こんなに早急に全てを決める事も無かったのだ。

内心、（それならば始めから言ってくれたら良かったのに）という、不満が無い訳ではなかったが、浩二の希望を聞かない訳にはいかなかった。

（夫を立てるのは、妻の務めよね）

ところが、6月の挙式まで後一ヶ月というある日、浩二から連絡が来た。

それは、唐突過ぎるほど、唐突な話だった。

「若菜、大変な事になったよ」

「どうしたの？」

「お袋が、入院したんだ」

電話の向こうからショックを隠そうとする、浩二の息遣いが聞こえてくる。

「お母さんって、北海道の？」

浩二は北海道から大学入学の為に出て来て、そのまま帰らなかったのだ。

勿論、若菜がそれをとにかくは言えない。

若菜自身も同じ様なものだ。

「そうだ。一人で頑張ってたんだが、2日ほど前に倒れて、病院へ運ばれたそうだよ。」

「それで、状態は？」

「それが、良くないらしい。検査をしてみないと分からないが・・・」

「浩二・・・」

「だから、しばらく北海道へ帰る事にしたよ」

若菜の頭に、結婚式という文字が浮かぶ。

「そうね・・・そうした方が良いわね。私も一緒に行こうか？」

「いや、はつきりしないのに、女性を連れて行く訳には行かないよ」
確かにそうだ。

どんな病状かも分からないのに、どこの馬の骨かも知れない女を連れて帰ったのでは、話がややこしくなる。

「分かったわ。向こうに着いたら、連絡を頂戴ね」

取り急ぎという感じで、電話が切れた。

若菜はケイタイを握り締めて途方にくれた。

「どうしよう・・・もし、お母さんの状態が悪くて、彼が戻って来れなかったら・・・」

若菜は不安で立っている事が出来なくなっていた。

涙が頬を流れる。

どうしようもない不安。

これが、次の罨の幕開けだとは、知る由もなく・・・。

未来から連絡があつたのは、その日の夜だった。

「若菜、気分はどう？」

浩二からの連絡を受けてから、気分が沈み、とても仕事など出来そうに無いと判断した若菜は、営業所に連絡を入れていたのだ。

勿論未来にも、仕事を切り上げる旨の連絡を入れていたのだった。

「うん・・・とっても、苦しいの・・・」

涙が止まらない。

あれから、アパートに戻り膝を抱えて泣いていた。

電気を点ける気力もない。

只々、不安に打ち勝つ為に今を乗り切る為に泣くしかないのだった。

「重症だね。今からそっちへ行ってもいい？」

「うん、いいけど」

「何も食べてないんでしょ？」

「うん、食べてない・・・」

未来は電話を切ると、若菜のアパート目指して歩を進めた。

今の若菜の状態が、一体何が原因なのか大よその検討は付いていない。

あれほど明るく、結婚の話をしていた若菜が、急に沈み込むというのは解せない話だ。

未来の頭の中では、浩二の化けの皮をどう剥がすべきか、その計画ばかりが渦を巻き出していた。

アパートへ付くと、首を項垂れ、目が腫れている若菜が出迎えてくれた。

（あああ、やっと結婚だと思ったのに、よっぽどの事があったんだなあ）

未来は、靴を脱ぐとテーブルの上にコンビニの袋を置いた。

中から、弁当が二つと惣菜が幾つか出てきた。

そして、悪戯そうに、缶ビールを出すと若菜に1本を渡した。

タオルを握り締めて、頻繁に涙を拭いながらビールを受け取る。

「要らないわ。飲みたく無いのよ」

「だめよ、飲んで嫌な事は忘れるのよ！」

二人でテーブルに着き、弁当のラップを剥がす。

若菜の暗く沈んだ顔を横目で見ながら、元気に「頂きまーす」と声を張上げる。

「ほら、食べないと、浩二さんに嫌われるわよ」

浩二という名前を聞いた途端に、又しても涙が流れる。

（やつぱり・・・こうなると、思ったんだよね）

「一体、どうしたの？」

大よその検討は付いているが、はっきりとした事を聞かねばなら

ない。

「それが・・・浩二の、お母さんが入院して・・・しばらく、実家に帰るって」

（ああ、そういうことか。詐欺師が良く使う手だよね）

「それで？入院したただけなんでしょ？」

「うん・・・でも、不安で・・・」

涙が止まらない。

「だって、結婚式だって近いのに」

「そういう事もあるわよ」

（本当ならね）

「でも、もしも・・・病状が悪くて、帰って来れなかったら」

「うん」

「せっかく、結婚式の準備を進めて来たのに、結局式を挙げられないかも知れないわ」

「・・・」

（不安の原因は、そっち？）

「どうしよう、式場だって押さえたのよ」

「・・・あのさあ、若菜・・・まだ、分からないじゃない。落ち着きなよ」

「うん、そうは思っただけど、何だか分からないけど不安でしょうがないのよ」

「浩二さんも向こうに着いて、はっきりしたら連絡をくれるでしょう」

「そうだと思うけど」

「今不安がっついていても、どうにもならないよ」

「分かってるのよ。分かってるんだけど・・・」

そう言つと、又してもワツと泣き出してしまった。

（ようやつと、結婚だものね。分かる気もするけどさあ。もっと、凄い事が待ってる様な気がするんだけどなあ）

暫くすると落ち着いて弁当に箸を付けられる状態になった。

何とか、不安を口にしながらもビールに口を付ける。

未来はそんな若菜を見つめながら、そつとため息を付いていた。

若菜が酔いつぶれた後、未来にはする事があった。

今日の目的は若菜の愚痴を聞くというよりは、その目的を果たす為だ。

未来は若菜のケイタイを手にすると、浩二の番号を自分のケイタイへと転送したのだ。

そして元あった場所へ置くと、部屋を出たのだった。

（必ず、若菜の仇を討ってやるからね！）

そつと玄関を閉めると、ゆっくりと歩き出した。

深夜のアパートに、ヒールの音が響いていた。

第十八話 幕開け（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）
【ポチッ】とお
願いします

第十九話 最後の情事

その頃浩二は都心から外れた郊外で、のんびりとアバンチュールを楽しんでいた。

相手は、目下の力モ木崎恵美だ。

恵美も又、浩二に結婚をエサに多額を巻き上げられている。

「ねえ、雄。いつになったら、結婚してくれるの？」

汗の光る胸を隠そうともせず、浩二に寄り添う。

興奮の後の一服を楽しんでいた浩二は、ゆっくりと恵美に視線を向けた。

「仕事は順調に波に乗ったらだよ。もう少しなんだけどな」

「もう少し、もう少しって、もう1年だよ！」

「怒った顔も、可愛いよ」

「雄はいつもそうやって誤魔化すんだから」

「誤魔化してるわけじゃないよ。ただ、事業を成功させる為には、どうしても金が必要」

「この間、渡したじゃない」

「あれだけで足りると思うところが、可愛いよな」

可笑しそうに笑ってみせる。

「笑わないでよ！」

「いいか、事業っていうのは金が掛かるものなんだよ。俺一人で、全てをこなせる訳じゃないんだ。どうしても、電話番号が必要になる。その電話番号の給料だって払わなくちゃならないんだ」

「今時・・・ケイタイがあるじゃない」

「ケイタイは、ケイタイ。電話番号が居るって事が、会社として大事なんだよ。お客さんが電話を転送してるって分かったら、信用が無くなるだろ」

「う・・・ん」

「恵美がどこかの会社に電話して、転送された電話に相手が出たら

どうだ？よっぽど小さな会社だと思わないか？」

「そりゃ、そうだけど」

恵美の髪を撫でながら、優しく呟いてみせる。

「俺は、自分の為に頑張ってるんじゃないんだ。恵美、お前の為なんだよ。お前に、不自由な暮らしをさせられるか？」

「私は構わないのよ。雄が居てくれたら、それだけでいいの」

「俺は、40歳だよ。お前のご両親に会うにしても、今の身分じゃお嬢さんにくださいなんて言えないよ。俺が親でも怒るさ」

「そうかなあ・・・」

「もう少して波に乗れるんだ。その為には金が必要なんだよ」

執拗に、金の話を持ち出す。

結婚したがっている相手には、それがあれば結婚できると仄めかす。

これが浩二のやり口だ。

「後、どの位必要なの？」

「500万ってとこかな」

「500万！！」

「ああ、事業だからね。それなりの投資は必要だ」

「だって、私・・・お金の事をとやかくは言いたく無いけど、雄には800万も渡したわよ。それでも、まだなの？」

「恵美、仕方が無いのさ。お前には分からないだろうが、仕入れには金が掛かるんだよ。店舗も借り物だ。接待費も使わないと、客は付かないからね。日本って国は、そういう国なんだよ」

困惑した様な恵美の顔。

「そんな、困った顔をするなよ。俺が何とかするから、後500万、金作が出来ないようじゃ、事業主とは言えないからな。」

浩二は、ベットから下りると風呂場へと向かった。恵美が、裸体のまま着いて来る。

「当てるはあるの？」

「一緒に入るか？」

「うん・・・当ては、あるの？」

「当てか？無い事も無いな。」

湯船に体を沈める。

さっきまでの、燃えたぎるようなエネルギーを放出した後だけに、疲れが体全体を支配する。

32歳とはいえ、子供を生んでいない恵美の裸体は、未だ張りがある。

浩二は目を細めて、細部まで舐める様に見ていた。

恵美の体が、ゆっくりと湯船に浸る。

（若い時は、このままもう一戦出来たんだがな。俺も、歳かな）

「どんな当てなの？」

恵美が、執拗に繰り返してくる。

浩二は、しつこく聞かれるのが好きではない。

勿論、しつこく聞かれる事は端から想像はしているのだが、それでも面白くは無い。

（全く、女って奴は、どうしてこうもうるさいんだ！）

情事後の余韻を楽しめるのは、出会ったばかりの初々しい頃だけだ。

その時期を過ぎれば、裸体を隠す事すらなくなる。

それはそれで目の保養なのだが。

「金持ちのお客さんがいてね、出してくれても良いと言ってるんだよ。」

「へえ、凄じじゃない！」

「そう、凄い話だね。ただし、条件付だ。」

「何？」

「金持ちのお客さんは女性だ。しかも50歳は超えてるね」

「うん・・・」

「暇な時の相手をして欲しいそうだ」

「暇な時の相手・・・って」

「そうだよ、恵美にしている事を、その女性にもするということだ」

そう言いながら、浩二の手が恵美の乳房を掴んだ。

「それって！・・・」

あながちこの話も嘘ではないのだ。

次の力モが結構な金持ちだからだ。

年齢は、若菜よりも上だが、見た目には若い。

さすがに金持ちだ。自分に時間と金を掛けているのだろう。

恵美が何と言うか、その反応が面白そうだと思ったまです。

誰が何と言おうと浩二の客だ。頂くものを頂かねばならない。

更に言うなら、年齢的には範疇では無いのだが、この際金額がかい。

ある程度のサービスは必要だろう。

ここは、ビジネスとして考えなくてはならない。

「いやだ！だめよ！そんな事、そんな事する位なら私が何とかするからやめて！！」

（そう来ると思ったよ。お前の性格ならな。）

浩二は、心の中で笑った。

「そうは言っても、恵美だって際限なく貯金があるわけじゃないだろう？」

「そうだけど。でも・・・後、500万でしょ？それだけあれば良いのよね」

「そうだ、それだけあれば、何とかなる筈だ」

「私の貯金が、後400万あるわ」

「それじゃあ、100万足りないよ」

「大丈夫よ、銀行から借りるから。それがだめなら、親に頼むわ。」

「それでもダメならどうする？」

「それでもダメなら・・・街の金融業者に借りるわ」

徐々に声が小さくなっていく。

（そうだな、街金に限度いっぱい借りてもらうさ）

「ありがとう、恵美。そこまでして・・・嬉しいよ。二人の未来の為にそこまでしてくれるのか」

浩二の舌が、恵美の項を這う。

そこが恵美の喜ぶ場所である事は、承知しての行動だ。

（もっと絞らせて貰うんだ、最高の喜びを味あわせてやるさ）
恵美の喘ぎ声が、切なく浴室に響き渡った。

第十九話 最後の情事（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは、又来週更新します。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）
【ポチッ】とお
願いします

第二十話 容態

浩二から連絡があったのは、3日程してからだった。

何も手に付かない状態でも、仕事はしなくてはならない。

一人でいれば、余計に暗く沈んでしまう。

営業に回っていれば、少なくとも客と会っている時だけは、浩二の事を忘れられた。

とにかく今は仕事をするしかない、自分に言い聞かせていたのだ。

そんな中、浩二からの電話だ。

ちようど客先で商談していた時だったのだが、若菜は「緊急な電話なので」と外に出た。

夏が来る事を知らせるように、アジサイの花が蒼く輝いている。

そろそろ雨に当たって、自分達の美しさを見せびらかしたいのだろうか。

花たちが、一斉に若菜に微笑んだ様に見えた。

そんなアジサイを眺めながら、若菜は送話ボタンを押した。

「もしもし？」

「若菜、大変な事になった。お袋、心臓が悪かったらしい」

「心臓……」

「ああ、それかなり前からだったみたいで、その為に今回倒れたんだそうだ」

「そう……それで？」

「手術をしないと、助からないそうだ」

「!……」

「でも、金が無いんだよ」

電話の向こうで、泣いているのが分かる。

この3日間、どれほど苦しんだのだろう。

「そう・・・お母さん、保険は？」

「いや、何も入っていないらしい」

「それは・・・」

有り得ない事ではない。

一人で暮らしていて、生活が苦しければ保険にまで手が回らないものだ。

いくら息子がいても、つい数ヶ月前には自分がお金を用立てる程だったのだから。

まして、結婚資金すらない人だ。

「兄弟は？」

「兄は・・・音信不通だよ」

悔しそうに語る浩二。

その悔しさが伝わって来る様だ。

「妹さん、居たよね」

古い記憶を呼び覚ます。

大学時代に交わした会話。

「妹の所も苦しくてダメなんだ。金の話になると、自分の所は借金があるからって」

「そう・・・心臓なの」

心臓の手術となれば、多額の医療費が掛かる。

事によっては保険対象外だ。

例えば、保険内で何とかなったとしても、ベット代や食事代など掛かるものは出てくる。

それは、必要経費だ。

それらを誰が負担するのか。

まだ自分には結婚資金としてのお金がある。

いや、それ以上の蓄えがあるのだ。

それを浩二も知っている。

「若菜・・・頼む、今回は・・・今回だけは、俺が何とか作るなんて、軽はずみな事言えないよ」

それはそうだろう。

北海道に居る今。

親の傍に居なくてはならない今。

浩二に何が出来るだろう。

しかし、その貯金を出してしまつたら、自分の夢が全て消えて行くのだ。

（ずっと抱いていた不安はこれだったのかしら）

「分かつたわ」という、一言がなかなか出なかった。

どうしてなのか、どうしても簡単に譲れない様な気がしてならない。

（貴方のお母さんだから助けたい。でも、私は会った事もない人）

（ならば、会ってから渡したらいいんじゃないかしら）

（そうすればきつと納得できるわ）

「浩二、私そつちへ行くわ」

「え？ 何だつて？」

浩二の声が冷たく響く。

（どうしたの？）

「だめだよ。こつちへ来てどうするつもりだよ」

「お母さんに会いたい」

「病床で苦しんでいるお袋にか？ 会って何て言つんだよ。俺の嫁さんだつて言うのか？」

「そうよ。そうすれば、お母さんも安心するでしょ」

「お前は、俺のお袋に早く死ねとでも言うのか！ 安心させて、万が一の事があつたらどうしてくれるんだ！ 俺は・・・俺は・・・どうしたらいいんだ・・・」

冷淡に言葉を発したと思えば、喚き出す。

それは、まるで錯乱状態さながらだ。

（冗談じゃねえ。北海道になんか行かれてたまるかよ）

（何としても行かせねえ！）

「若菜、スマン。もういい・・・所詮、お前にとつたら他人だもんな。俺にとつては、大事なお袋でも、お前には他人なんだよな。もういい・・・」

「浩二・・・ごめんなさい。そんなつもりで言っただんじゃないわ」
（突き放されるのに弱いんだよ、女はさ）

浩二の口元が歪んだ。

「いや、分かったよ。もういい。結婚も考えさせてくれ」

「浩二待って！違うのよ！お金は送るから。送るから、お願い！」
「本当か？」

（そうよ、浩二は今、失意のどん底に居るのよ）

（私は何て酷い事を言っただの！！）

（彼を救えるのは、私しかないのに）

「ええ、明日にでも送るわ。いくら送ればいい？」

「ありがとう、若菜なら分かってくれると思ったよ。そうだな、差し当たり100万だな」

又、冷淡な声だ。

感情の起伏が激しい。

それが、より一層浩二の失意を感じさせる。

「100万ね。分かったわ、明日振り込むから」

「若菜、お袋が退院するまで、俺はこっちにいますからな」

「・・・じゃあ・・・結婚式は」

「延期だな」

恐る恐る聞く若菜に対して、いとも簡単に言っただけの浩二。

まるで、結婚式なんてどうでも良いと言いたげな口調だ。

あれほど、二人で式場を見て回って、時間を費やしたのに。

（浩二にとっては大した事じゃなかったのかしら）

ふと、式場を選んでいたら、ドレスを選んでいたら時の事が思い出される。

（浩二は、一度も口を挟まなかった）

（どんなドレスを着ても、見もしなかった）

（浩二にとっては、どうでも良かったの？）

ケイタイから、通話が切れる音がした。

「あっ！」

まだ、話したい事があつた気がして、声を出したのだが、電話から浩二の声は二度と聞こえて来なかった。

第二十話 容態（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは、又来週更新します。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）
【ポチッ】とお
願いします

第二十一話 間違い電話

電話を切ると、すぐに着信があった。

（何だよ、まだ何か言いたいのかよ）

面白く無さそうに、ディスプレイを開けて見た。

ところが、番号だけで名前が無い。

（何だ？誰からだ？）

カモからの電話は、全て番号を登録してあるので、ディスプレイに表示されるのだ。

受話ボタンを押し耳に当てると、若い女の声が飛び込んで来た。

「お願い！もう、これ以上何も言わないから！」

「え？あの・・・」

「あ・・・知也でしょ？」

（何だ？間違い電話か？）

浩二は、近くにあったベンチに腰掛けながら、ゆっくりと優しく話し出した。

「違いますよ。貴方のお探しの方ではありませんが、かなり切迫している様子ですね」

「まあ、お恥ずかしい・・・ごめんなさい。彼が・・・」

「・・・彼が、どうしました？私でよければ、話を聞きましょうか？」

「え、でも」

女の戸惑いが伝わってくる。

それはそうだろう、間違い電話なら、「違いますよ」の一言で終わるものだ。

「かなり辛い思いをされている様に聞こえました。間違い電話も何かの縁でしょう。誰かに話せば、落ち着くという事もありますよ」

「ええ、でもお時間を取らせては申し訳ありませんし」

「私ならちょうど時間が余って、どうしようかと考えていた矢先で

す」

「そうですか。でも、電話でお話できる様な事でも無いので・・・」
「だったらこうしませんか？貴女は、至って聡明な方の様だ。もし、貴女と私の距離が近かったら、食事でもしながらゆっくりと話をする。逆に、会える距離で無いなら、貴女も私もこの縁は無かったものと考えて忘れる」

電話の向こうから、クスクスと可笑しそうな笑い声が聞こえて来た。

（おつ、こりゃ脈ありだな）

「可笑しな方ね」

「よく言われます」

「もし会って、私がとても危険な女だったら、どうなさるの？」

「貴女が危険かどうかは、この電話で分かります。貴女は優しく思いやりのある女性だ。そして、私は決して危険な男ではない。これは、神に誓って言えますよ」

（死神に誓ってなら、言えそうだな）

「そうね・・・これは新たな出会いの賭けかしら」

「そう願いたいですね」

女は少し考えると、

「では、貴方はどこにいるのかしら？」

と、聞いてきた。

「多分、貴女の近くですよ」

又、女が楽しそうに笑った。

「そんな事は分かりませんわ」

「では、貴女はどこにいますでしょうか？」

「私が先に言ったのでは、貴方が遠くても近いと言われたら、それまでですもの」

（なるほど、バカでは無い訳か）

「しかし、余りにも遠ければ、会いたくても会えないではないですか。同じ事ですよ」

「そうですね・・・それも、ありますけど」

「大丈夫ですよ、私には羽は無い。近くも無いのに、近いと言って飛んでいく事は出来ません」

「ふふふ・・・私は、K町にいます」

「これは！近いですね、20分で貴女の傍に行けますよ。会ってくれますね」

「本当ですか？もし、私が待ってても貴方がいらっしやらなかったら、私はとんだおバカさんになってしまうわ」

「貴女を道化になんてしません。誓いますよ」
「では・・・」

女は以外にもあっさりと、待ち合わせの場所と時間を約束して来た。

（結構な遊び人か？）

（まあ、それならそれで、遊ばせて貰うけどな）

女は名を名乗ると電話を切った。

女の名前は、藤野美里。

浩二は電話を切ると、K町へと足を向けた。

（藤野美里か・・・声はいいな）

（確か、男の名前を呼んでいたな）

（まあ、カモにならないまでも、いい女って感じだぜ）

（今夜も又、楽しませてもらいましようか）

浩二の肩が、可笑しそうに大きく波打って動いた。

第二十一話 間違い電話（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは、又来週更新します。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）
【ポチッ】とお
願いします

第二十二話 待ち合わせ

待ち合わせの場所は駅から外れた商店街の路地に在った。

その町に住んでいる者でなければ、知る事も無いであろう、奥ゆかしすぎるほどの佇まいだ。

それを店だと言われなければ、誰も気が付かないだろう。

ドアに掛かる「welcome」の文字。

ドアを開けようとした時、女の声が背後から聞こえて来た。

「藤堂さんですね」

浩二は振り向くと、背後にいる女を見た。

女は、楽しそうに笑顔を振りまいている。

その姿は、均整の取れた体で痩せすぎても太りすぎてもいない。

服装は、淡いピンクのスーツにシンプルなブラウスを嫌味なく着

こなしている。

化粧も髪も、どこを取っても、浩二の趣味にぴったりと合う。

（こりゃー、掘り出し物だな）

年の頃は、30前後だろうが、笑うと多少の小じわが出るが、気にはならない。

女はもう一度同じ言葉を繰り返した。

「藤堂さんですね」

「藤野美里さんですね」

「ここは分かり辛いと思ひまして、お待ちしておりましたの」

美里が軽く会釈しながら、店のドアを開けた。

電話の声より、覇気のある喋り方だ。

美里は自分から店の中に入って行くと、

「ここで宜しいですか？」

と、壁際の席を指し示した。

「ああ、私はどこでも構いませんよ。床でもいいくらいです」

「まあ、さすがに床に座るのも困りますから」

美里は、コロコロと笑うとテーブルに着いた。

浩二もそれに習ってテーブルに着く。

ウェイトレスがメニューを持ってやって来た。

美里は、ケーキが美味しいのと言ってケーキと紅茶を注文している。

浩二も、同じ物を注文した。

「藤堂さんって、お電話よりお若くてビックリしました」

「いや、もうオジサンですよ。美里さんこそお若くてビックリです。こんなオジサンが相手に申し訳なかった」

「嫌ですわ。私だって、いろいろと経験を積んで、それなりの年齢ですよ」

「そうですか、お若く見えるから、てっきり20代かと思いましたよ」

「お上手ですね」

否定しながらも、嬉しそうに笑っている。

（経験を積んでか、どれほどの経験を積んで来たのか、知りたいものだな）

「それで、さっきはどうしたんです？私でよかったら、聞きますよ」

「ああ、さっきの・・・大した話じゃありませんのよ」

美里はお手拭を折り畳むように弄んでいる。

「気持ちがスツキリすれば、又話が弾むと思いますが、それとも、言いたくないかな」

「そういう訳じゃないんですよ。本当にくだらない話」

美里はそう言いながらも、少しずつ話し出した。

「彼が出て行ったんです」

「一緒に暮らしていたんですか？」

「ええ、そんなに長い付き合いでもないんですけど。一緒に暮らしたして、半年くらいでしょうか」

「半年ですか」

「急に、ギャンブルに嵌ってしまって、借金を作ったらいいんです」

「それは、いけないね」

「ええ、それを私に返済してくれと」

（おいおい、俺と同じかよ）

「それで貴女は」

「断りました。だって、余りにも自分勝手で。言い様があると思うんですよ。ちゃんと話してくれば私だって協力しない訳じゃないんですけど」

「そうでしたか。それで、彼が怒って出て行ったという事ですか」

「ええ、くだらない話ですね」

「いや、貴女達にとっては大変な問題だ」

「もういいんです。そういう人だったと諦めますから。それに・・・」

美里が、ウェイトレスの運んできたケーキにフォークをさして口元まで運ぶ。

「それに、何ですか？」

「彼が出て行ったお陰で、藤堂さんに会えたわ」

そう言ってケーキを一口、口に入れた。

いかにも、美味しいと言いたげな笑顔だ。

（こいつは、俺を誘ってるのか？）

（面白い、乗ってやるか）

浩二も、同じように一口食べてみる。

あまり、甘い物は好きではないが、その場の雰囲気というものがある。

女を自分のものにするには、雰囲気大切にしなければならぬ。

（女はムードが大事なのさ）

「これから、どうするんですか？」

「どうっておっしゃると？」

「時間があるのなら、少しお相手をお願いしたいと思ひまして」

「相手？」

「ええ、これから映画でも見ようと思ったのですが、一人で見るの

も味気無いものです。貴女のような綺麗な女性と見る事が出来たら、さぞ楽しいだろうと思ひましてね」

「あら、綺麗だなんて」

「そして、夕食と一緒にどうでしょう？」

「・・・」

「夜景を眺めながら弾き語りが聞ける、落ち着いたレストランがあるのですが、貴女と行けたら楽しいだろうと思ひましてね」

「ステキだわ」

美里の目が輝いた。

浩二はそれを見逃さなかった。

「一人で部屋へ帰っても、寂しいだけでしよう。彼が居ない今夜は誰かと一緒に居た方がよいのじゃありませんか」

美里はケーキを食べながら、考えている様子だ。

これ以上押しでは駄目な事は経験で分かっている。

押し過ぎれば獲物は逃げて行く。

二人の間にしばしの沈黙が流れた。

そろそろ、頃合と見た浩二は最後の詰めに出る。

「どうやら私は、貴女に無理強いをしているらしい」

「いえ、そんなこと」

「貴女が一人、部屋で寂しい思いをされるのは私も辛い。しかし、貴女が望まない事を勧めても仕方がありません。今日は、これまでにして気が向いたら電話をください」

そういうと、名刺にケイタイ番号を書いてテーブルに置いた。

美里は、テーブルの上の名刺に目を落とした。

名刺には、【ファッションコンサルタント 代表取締役社長 藤堂 浩】とある。

「ファッションコンサルタントをされているんですね。しかも社長さん！」

（食いついて来たな）

「いや、大した事はありません。コンサルタントと言っても、小さ

な会社です」

「どのくらいの社員さんを抱えていらつしゃるんですか？」

「そうですね、ざっと50人程度でしょう」

「そんなにたくさん？」

浩二は、大した事は無いと言いながら、ゆっくりと頷いて見せた。とはいえ、ファッションコンサルタントが、どんな仕事をして、本来どの程度の社員が居るものなのか、まるで理解していないのだ。この手の女なら、こういった肩書きが効き目があるだろうという、その程度の名刺だ。

その他にも、名刺の種類は多い。

一目で女の性格を見抜き、好みそうな肩書きを出してやるのだ。

案の定、美里の態度が一変した。

「凄いですね。だから、こんな昼間に時間があるのね」

「そう言いながら、笑顔がさつきまでどこか違っている。」

「まあ、確かにこんな時間にふらふらしてるのは、可笑しいですね」「どこか気品がありだから、変な人だとは思いませんでしたけど、社長さんとは思わなかったわ。あら、ごめんなさい」

「いや、そうですね。私位の社長なら、掃いて捨てる程いますから」

「でも、大概の社長さんは、忙しそうにしていますよね。接待だとか、会合だとか」

「そうですね。しかし、私の会社は部下がしっかりしているので、社長が動く事はほとんどありません」

「そうですね」

「私は働くのが嫌いなんですよ」

「そう言つて、ウインクして見せた。」

「まあ、そんな事をおっしゃって」

「そう言いながら、美里はけけらと笑つて見せた。」

「では、私の素性も分かった所で、いかがです？もう一度お誘いしても宜しいですか？」

「私からも聞いて宜しいかしら？」

「何でしょう？」

「藤堂さんは、ご結婚されているのですか？それとも、婚約中とか？」

「それは、どういうことでしょうか？」

「失礼とは思いますが、このままでは、本気で好きになつてしまいかもれません。そうなつてから、妻がいますなんて言われたら、私は立ち直れませんわ。それなら、今はつきりさせておきたいの」

「ほう、思った以上にしっかりした方だ。私には、妻はいませんよ」
「では、婚約されている方は？」

「いません」

「恋人は？」

「いません」

「本当に？嘘ではありませんのね」

「貴女に嘘を言いたくはない」

「そうですか、ありがとうございます」

「お互い大人ですから、これが本気の恋に発展しても可笑しくは無い。そう思つても宜しいですね」

「ええ、勿論です」

（コイツはいいや、自分から飛び込んできやがった。結局は肩書きだよな）

浩二の目には、服を脱ぎ捨て、淫らに狂う美里が写っていた。

「では、今夜はずっと一緒にいてくれますか？」

直球だ。

この手の女は、回りくどいやり方を嫌う。

美里は、浩二をじっと見つめ、名刺をバックへしまつとニッコリと微笑み、

「今夜は、気分が乗りませんわ。後で、お電話を差し上げても宜しいかしら。その時は、大人のお付き合いを楽しみにしていますわ」と、告げた。

浩二は、悔しさを胸の奥底にしまつと、同じようにニツコリと微笑み頷いて見せた。

「勿論です。その時は、貴女を離しませんよ」

浩二が、美里の手を握った。

美里も浩二の手を握り返した。

（初日でなかったら引き寄せて、キスの一つもする所だ）

（クソッ、今夜はこの女で楽しめると思ったのに、残念だな）

（まあ、すぐに俺の物になるだろうがね）

浩二はゆっくりと手を離すと、「貴女に先に行かれるのは寂しいので、私から先に出ても構わないでしょうか」と言うと、伝票を手に取り出口へと向かった。

美里は、浩二の背中をじっと見つめていた。

第二十二話 待ち合わせ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）
【ポチッ】とお
願いします

第二十三話 暴露

若菜は通帳を眺めていた。

残りは、400万。

結婚資金として、確保していたお金だが、浩二の母親の病気に使わねばならない。

この全てを使ってしまったら、結婚式も新婚旅行も霧の中に消えて行ってしまう。

それでも仕方が無い事なのだと、自分に言い聞かせてみるが、どうしても自分自身を納得させる事が出来ない。

「若菜！」

余程集中していたのか、飛び跳ねる程驚いた。

「何をそんなに驚いてるの？しかも給湯室に籠って」

そうだ、仕事を終え営業所に帰って来たが、さっきから通帳と睨めっこしたままなのだ。

「コーヒー淹れに来たのか、通帳を眺めに来たのか、分からないわね」

「未来・・・」

「どうしたの？そんな顔して」

コーヒーを淹れながら、若菜を見ると、通帳を口元に当て泣きそうになっている。

「又、何かあったのね？！」

「それが・・・彼のお母さんが、心臓病で、手術だって」

「ふーん、保険は」

「入ってないって」

「あらら」

「それで、お金が必要だって言うのよ」

「いくら」

「とりあえず、100万」

「ふん。で、出してあげるの?」

「しょうがないよね。彼のお母さんだし、手術しなくちゃならないって、電話の向こうで泣くのよ」

「でも、若菜としては、納得がいかないんだ」

「うん」

「若菜も気が付いてるんじゃない?」

「何が?」

未来が、じつと若菜を見つめた。

そこへ、後輩が入って来た。

「あら、邪魔になっちゃうね。ごめんごめん、若菜帰ろう」

「うん」

未来が若菜を押して、給湯室から出ると、「話があるから、若菜の部屋へ行くわ」と言った。

有無も言わさない言い方だ。

余程の事が無い限り、未来がこんな言い方はしない。
こうなると、どちらが年上か分からなくなる。

未来と共に、若菜のアパートへ帰って来た。

部屋の中は寒々しい。

どんなに明るい季節が来ようとも、主人が泣き虫だと部屋まで輝きを失ってしまう。

部屋の明かりを点け、買ってきたビールをテーブルに置く。

二人の密談の始まりだ。

淡いピンクのスーツのジャケットを脱ぎ、シンプルなブラウス姿になる。

手首のボタンを外し、一つ二つめくり上げ、ビールを手にする。
プシュッと音を立て、ビールの開く音がする。

若菜と未来のビールが、宙でぶつかる。

「で、さっき気が付いてるって言ってたけど」

若菜が口火を切る。

ビールを口にしながら、未来が横目で若菜を見た。

「どういう事？」

ビールの缶を口から離し、口元を拭う。

「これを聞いたら分かるかな」

そう言つて、ペンをテーブルに置いた。

「聞くつて、ペンじゃない」

「最新兵器だよ。これ、録音機」

そう言つと、何やら操作し始める。

「従来の録音機だと人前に出しておく、いかにも録音してますつて感じでしょ。最近は、こういう便利なアイテムがあるのよ。これなら、テーブルに置いておいても変じゃないしね。バックに差しておいても、ポケットでも変じゃないでしょ」

「なるほどねえ」

「感心してられるのは、今のうちだと思っけどね。はい、始めるよ」

ペンをテーブルに置くと、何やら声が聞こえて来た。

それは、聞き覚えのある男性の声だ。

じつと聞いていると、浩二の声と同じだという事が分かる。

「これつて・・・」

未来がしっかりと頷く。

会話の内容は、完全に相手を口説いている。

会話の最後には、はっきりと妻も婚約者も恋人もいないと宣言している。

そして、次に会った時には、大人の時間を楽しもうと。

それが何を意味しているかは、誰に説明を受けなくても分かる。

「まさか・・・だつて・・・どうして？」

「その、まさかよ」

「相手は？彼が話してる相手は？」

「私よ」

「未来がどうして?!」

録音機を止め、名刺をバックから取り出した。

「ずっと変だと思っていたのよ。だから、何とかして若菜の目を覚まさせたかったけど、完全に突っ走ってたでしょ。どうしようもなくてさ、しょうがないから、囑捜査したのよ」

「どうやって彼と知り合ったの？」

「簡単よ、若菜のケイタイから番号をもらって、間違い電話を装って掛けたの。簡単に引っかけたわよ。すぐに、会いましょうって事になってね」

「そんな・・・じゃあ、彼は東京に居るって事？」

「これが彼の筆跡なら、そうなんじゃない？」

若菜は、名刺を手にした。

【ファッションコンサルタント 代表取締役社長 藤堂 浩】

「名前が違うわ・・・」

「当たり前でしょ。詐欺師なんだから」

「決めて掛からないでよ」

名刺を裏返してみると、確かに見た事のある筆跡が並んでいる。更にその数字は、間違いなく浩二のケイタイ番号だ。

「若菜は騙されてるのよ」

3本目のビールを開けながら、未来が言う。

「この状態で、よく飲めるわね」

「素面で人の恋路を邪魔できますか！」

「でも、でもやっぱり信じられない！」

「そっいうと思った。じゃこれ」

次に出されたのは、ケイタイで撮った写真だ。

店なのか、民家なのか分からないが、建物の前に男性が立っている。

その男性の写真が数枚。

そして、最後の写真はしっかりと顔を写していた。

「それ、浩二さんでしょ」

ここまで来たら否定は出来ない。

確かに、そこに写っているのは間違いなく浩二なのだから。

若菜は訳が分からないと言いたそうに、ケイタイをテーブルに置いた。

「これ・・・どうやって、撮ったの？」

「待ち合わせの場所に現れるのを待ってたのよ、隠れて」

「性格悪い・・・それで？」

「人の性格を言えるの？それで、隠れて撮ったの」

「顔、モロ撮れてるじゃない」

「浩二さんの前に姿を現した時に、ケイタイを自分の顔に近づけて撮ったの」

と言いながら、ケイタイを自分の顔に近づけてボタンを押す。

画像を見ると、確かに若菜の顔が撮れているのだ。

「簡単よ、こんなの。カメラを相手に向けてても、ケイタイだと思うから、相手は疑わないでしょ」

「じゃあ、じゃあ彼は北海道ではなくて、ここに居るという事？」

「そうなるね」

ケイタイをビールに持ち替えて、さらっと言つてのける。

「彼が今まで言っていたのは、全部嘘だったと？」

「でしようね」

「彼は詐欺師だったと？」

「そういうことだね」

スルメを齧りながら、未来が相槌を打つ。

「これって、何の詐欺になるわけ？」

「結婚詐欺」

「私は詐欺に遭っていたという事？」

「そうなるね」

「そんな・・・そんな・・・浩二がそんな事・・・」

あまりのショックに、手が震えてくる。

そんな事ある筈が無いと思いつつも、そうかも知れないという気がする。

いや、最初から可笑いとは思っていたのだ。

いくら何でも、余りにも昔と違い過ぎた。

例え18年とは言え、人間があんなにも変わる筈は無いのだ。しかし、若菜の中には『変わる人だっている筈だ』という思いがある。まして、愛し合った昔の恋人ならば尚更の事だ。

変わっていて欲しかった。

自分が愛した男だからこそ、あの頃を後悔して変わっていて欲しかったのだ。

だが、出会ってから1年が過ぎようとしている今、解せない事も多々あった。

結婚式場を見て回っても、デートをしていても、浩二は1円のお金も出さなかった。

自分はお金が無いからと、事ある毎に若菜に言ってきたのだ。

『済まない』『申し訳ない』『必ず返すから』そう言いながら、『部下を飲み連れて行きたいから、5万貸してくれ』『背広を新調しないとならないから、10万貸してくれ』と用立てる事が多くなってきた。

それに対し不満な顔を見ると、必ず返すと繰り返すか、結婚したら俺の稼いだ金は全て若菜のものになるのだから良いだろう、と切れ気味に不貞腐れる。

そんな時、やっぱり変わっていないのかも知れないという想いが過ぎる。

自分は大変な間違いを犯そうとしているのかもしれないと、不安が首をもたげる。

だが、40歳だ。

いや、41歳を迎えてしまっているのだ。

友達にも招待状を出している。今更、結婚式を止める等とどうして言えよう。

こんな事は、結婚してしまえば笑い話に転じてしまうのだと自分に言い聞かせて来た様な気がする。

手の震えが止まらない。

未来がビールを口にしながらも、若菜の様子を窺っているのが分かるが、今の若菜にはどうする事も出来ないのだった。

40女が結婚に焦って詐欺に遭う。

新聞やTVでは見知っていた事、それがまさか自分の身に起こる筈は無かったのだ。

無かった。

いや、あつてはならなかったのだ。

。。。

きつと、薄々分かっていたのだろう。

分かっていたながらも、分かりたく無かったのだ。

昔の恋人だからこそ、溺れたかったのかもしれない。

「で、いくら騙されたんだっけ」

「700万・・・強」

「強つて、プラスアルファがあつたんだ」

若菜が力なく頷く。

「痛かったね」

「痛いどころか・・・」

若菜はまだ信じられないと言いたげに、ビールを手にとると、グビグビと飲み干した。

未来はスルメを咥えたまま、新しいビールのプルタブを押し開け、若菜に差し出した。

「若菜、とりあえず飲んで、酔いつぶれろ。目が覚めたら、反撃だからね！」

まだ信じられないが、信じるしかないのだ。
信じるしかない事実。

だが、もしかしたら、これは未来の作り話かもしれないという、はかない期待が首を出す。

全てがビールで流れてくれればとばかりに、次々にビールを煽って行った。

（眠れない・・・）

いくら飲んでも眠くならない。

未来はとつくに酔いつぶれて、眠りの世界へと入ってしまったてい
る。

しかし、可笑しな事に若菜は全く眠れなかった。

いくら飲んでも酔いすら来ない状態だ。

（変な夜だな・・・）

こんな事は初めてだ。飲めば必ず眠気が来る。いつの間にか眠っ
てしまうというのが、いつものパターンなのだ。

それが、今夜は全く眠くならない。

若菜はゆっくりと立ち上がると、風呂場へと足を向けた。

シャワーを浴びれば、又違ってくるのではないかと考えたのだ。

浴室の明かりを点け、ブラウスのボタンを外す。

意識はしっかりしているのに、どういう訳かボタンが上手く外れ
ない。

（変ね、酔ってないつもりでもやっぱり酔ってるのかしら）

更に、ボタンを外そうと懸命になるが、どうした事が外れない。

ならば、他のボタンから外せば良いのだが、若菜は執拗に一つの
ボタンだけを外そうと指先に力を入れた。しかし、何をどうしても
外れない。

「どうして外れないの！」

思わずイラついた言葉が口を突いて出た。それと同時に思いもか
けず、涙がこぼれた。

「あれ？どうして涙が出るのかしら・・・あはは、変ね。涙腺が壊
れたのかしら」

一度堰を切って流れ出した涙は、止める事出来ない。

足の力が抜け、その場に座り込む形となり、それでも震える指は
ボタンと格闘を続けているのだ。

それはまるで、自分の心と体を引き裂こうとしているように見え

る。

声を出すまいと唇を噛み締めていたのが、いつの間にか嗚咽が漏れ、気が付かぬ間にわぁわぁと泣き出していた。

もう、何も考えられない。

一体、自分はどのように泣いているのか、それすら分からずに泣き続けた。

体中の涙が流れ出て、浩二の記憶まで流れてくれる事を祈るように泣き続けた。

深夜の浴室に若菜の泣き声が木霊していた。

第二十三話 暴露（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは、又来週更新します。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）
【ポチッ】とお
願いします

第二十四話 作戦会議

翌日は酷い頭痛に見舞われた。

それでも、目が覚めたのが不思議な位だ。

未来も又、酷い頭痛とム力つきで、トイレに駆け込んでいた。

「久しぶりに、二日酔いになったわね」

「今日が休日で良かった」

「本当・・・こんな酷いの、久しぶりだわ」

「記憶が無いんだよね、どの辺からどうなったのか」

「そうだね。ガンガン煽っちゃったから」

若菜は冷たいタオルで、顔を冷やししながら頷いた。

未来はソファーに横になっている。

昨夜は風呂場で久しぶりに泣いた。

それも、子供のように大声で泣いたのだ。

しばらく浴室で泣き、何かが心の中からストーンと剥がれ落ちた様な気がした。

すると、気分が楽になりやっとボタンが外れたのだ。

自分でもあの時の事が不思議でならない。

不思議でならないながらも、そんな事もあると思っていた。

不思議ついでに二日酔いも無ければ良かったのだが、逆に途中シヤワーまで浴びたというのにしつかりと二日酔いに見舞われている。

（これが恋の後遺症・・・だったりして）

我ながらくだらないとは思うものの、そんな事でも考えていないとぐるぐると目が回ってしまうのだ。

テーブルの上は、タベのままの状態で、空気を入れ替えなければ、アルコールの匂いが充満している。お陰で、余計に気分が悪くなる。

若菜は、這うように窓へとにじり寄った。

窓を開けると、外の空気が二人の肺を爽やかにしてくれる。

大きく外気を吸い、吐き出す。

吐き出しながら、浩二への想いを断ち切ろうとしている様に見える。

「で？どうする？」

未来がソファーに座り直すと、若菜に声を掛けた。

窓に寄り掛かりながら、外を眺めていた若菜が振り返る。

「どうするって・・・」

「詐欺師をどうするかよ」

「まだ・・・信じられないんだよね・・・完全には」

そうだ、どんなに涙で流した筈の恋でも、ボタンが外れた様に剥がれ落ちた恋心でも、やはりどこかに引っかかっている様な気がする。

タベ大声で泣いて、全てが剥がれた筈の想いが、少しだけ引っかかりぶる下がっている様な気がするのだ。どうして、自分はこんなに女々しいのだろうと悲しくなってくる。

「そりゃねえ。結婚詐欺にあつた人は、よっぽどでないと信じられないだろうけど」

「だって、そうかもしれないとは思っただけど」

「そうじゃないで欲しい」

「うん・・・だって、結婚式場まで決めたんだよ」

「それが手だつてば」

「分かっている」

又外へと顔を向ける。

休日も昼近い時間だ、外からは美味しそうな匂いが漂ってくる。

「料理か・・・」

「料理がどうかした？」

若菜がゆつくりと首を振る。

「何でもない。何でもないけど・・・」

白いレースのカーテン。

白いエプロン。

フライパン、フライ返し。

（浩二、目玉焼きと玉子焼きどっちがいい？）
新聞を読んでいた浩二が顔を上げて笑う。

もうすぐ、現実になる筈の夢だった。

しばらくすると、若菜が大きいため息を吐き、「よし！」と大声を上げた。

「どうしたのよ、急に！」

未来が驚いて若菜を見る。

「うじうじしたってしょうが無いつて事よ！何となく、分かっていた様な気がするんだから」

「何が？」

「浩二の事。詐欺とは思わなかったけど、やっぱり、現実とも違っよなって」

「さすが、伊達に年齢を重ねた訳じゃないか」

「そうだね」

二人が同時に笑った。

「じゃあ、作戦会議と行きますか！」

「どうせなら、徹底的に。二度と復活出来ない様な、そんな方法がいいわ！」

開き直った女ほど怖いものは無い。

二人はテーブルの上を片付けながら、どうやったら徹底的に叩きのめせるかという作戦会議を開始したのだ。

「他にも騙されてる女性がいると思うんだよね」

「それをどうやって探す？」

「奴のケイタイに電話番号が入ってるよね、きっと」

「多分ね、でもそれをどうやって調べる？」

「そうだよね」

「彼がケイタイを手放す時は・・・」

「シャワーを浴びてる時だ」

二人が顔を見合わせる。

シャワーを浴びるという事は、その先の危険があるという事だ。

「彼は、私には触ろうともしないわよ」

若菜がムカつきながら言葉を放つ。

「ええ！私？やだよ」

未来が大仰に首を左右に振る。

いくら囿捜査をしたとはいえ、そこまではご免こうむりたい。

「だよね」

ちよつと、ほつとしながらも残念そうにため息を吐く。

「ほつとしてるような、残念な様な、どっちよ！」

「複雑な女心です」

二人同時に噴出してしまった。

結局、ケイタイを調べるといふ事は、危険が伴なうという事で話が落ち着いたのだった。

本来なら、同類を集めて逃げられない様にするというのが一番なのだろう。

TVドラマ等でもこういった詐欺師に対する攻撃は、被害者の女性を男を袋叩きにすると、相場は決まっている。

しかし、ドラマと現実は違うのだ。

「場面は変わって、被害者が勢ぞろい、何てね」

あるはずが無いのだ。

結局、何をどう言っても、浩二は逃げるに決まっているのだ。

「そこをどう抑えるか、だね」

「そうだね・・・」

テーブルに肘を突き、カーテンが揺れるのを見つめている。

台所には、昨夜の残骸が山の様に積まれているのだ。

両者どちらも、洗う元気は無さそうだ。

いくら考えても名案が浮かばないまま、時間ばかりが過ぎていく。浮かんで来るのは、冗談なのか夢想なのか、ドラマの様な展開ばかりだ。

結局二人が決めたストーリーは、囃のドライブという事で、話が纏まったのだった。

第二十四話 作戦会議（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお
願いします

第二十五話 デートの誘い

二人は、未来の部屋で顔を付き合わせていた。

入念に計画を練り、詳細を書き留めたメモを未来に渡した。

未来がメモを手にして、じっくりと読み返している。

ドライブに誘うにも、若菜では誘いに乗る筈が無いという事で、未来が再度囀を引き受ける事になった。

元来、楽しい事とことん楽しむ性格の未来は、女優になったつもりで受話器を握った。

「もしもし」

すぐさま浩二が電話に出た。

未来は、若菜にウインクして見せた。

「藤堂さんのケイタイですか？」

「ああ、先日はありがとう。楽しかったよ」

「まあ、覚えていてくれたんですね。嬉しいです」

「勿論覚えていますよ。貴方の様な美人を忘れる訳が無い」

電話から漏れる声は、確かに浩二だ。

若菜は、分かっていた事とはいえ、やはり現実を突きつけられた様で、悔しさと哀しさが込み上げてくる。

「次はお食事に誘ってくださいさるって、おっしゃっていたから電話しました」

「それは嬉しいな。じゃあ、今夜でもどうですか？」

「残念だわ。今夜は用事がありまして・・・」

「そうですか、さすがに今夜は無理ですか」

浩二の優しい声音が未来のやる気を一層引き起こす。

未来の目が若菜を捕らえる。

その目は、化けの皮を剥がしてやるからね、と語っている。

「でも、今夜はだめですが、次の休みにどうかと思ひまして」

「次の休みですか？そうですね」
しばしの間が空く。

考えている風を装っているのか、本当に予定があるのか？

「2日後の土曜ですか？」

「ええ、それまでは仕事がありますから」

「そうでしょうか」

浩二の笑い声が響く。

「いや、社長をやっていると曜日の感覚が無くなりまして、失礼しました」

「社長さんって、いつも忙しいですものね」

「いや、そういう事じゃないんですがね」

「それで、いかがですか？できれば、一緒にドライブなんてステキだと思っんですけど」

「ドライブですか、いいですね」

「ご一緒したい所があるんです」

「ほう、それはどこでしょうか？」

「とても景色の綺麗な所なんですよ。是非、藤堂さんと一緒にしたくて」

「そういう事でしたら、ご一緒致しましょう」

「まあ！嬉しい！」

未来が大きな声で喜んでみせる。

「貴方は明るい人だ」

「よく、言われます。それで、当日の間ですが」

未来が予め用意しておいたメモを見ながら、時間を指定する。

浩二が快諾して電話が切れた。

ケイタイを切ると、未来が若菜を見た。

「本当にあの人、ここに居るのね」

若菜が頬に手を当てて、ため息を付いた。

「だから、全部嘘だったんだよ」

未来が、メモをテーブルに置きながら、若菜に言った。

「分かってる。分かってるけど」

分かつてはいるが、どうしても事実であって欲しく無いという、哀れな女心だ。

「とにかく、デートの取り付けはしたからね。次だよ!」

二人は、2日後のデートの用意を始めた。

「出来るだけ、悩殺スタイルがいいよね」

「悩殺って言ったって、そんな服持って無いよ」

「だから、できるだけよ」

「この間は、どんなのを着て行っただの?」

「スーツ」

「じゃあ、イメージをガラツと変えて・・・こんなのはどう?」

未来の洋服ダンスを勝手に開けて、若菜が洋服を物色して、出して来たのは。

「ミニスカートじゃない」

「自分のでしょ」

「これ、スラックス履く奴だよ」

「下にタイトスカート穿いたら?勿論、ミニで」

「完全に楽しんでるでしょ!」

「やるからには、徹底的に!」

未来がげんなりした顔で、洋服を見ている。

その顔が可笑しくて、若菜は笑い転げている。

「ちよつと!私にも年齢というものがね」

「大丈夫よ、若く見えるから」

結局無難な所で、未来が選ぶ事になった。

多少、若菜の思う所とは違ったが、それでもデートに漕ぎ着けているのだから、そこまで気を遣う必要も無いだろうという事で妥協したのだ。

アクセサリーを選び、髪型をどうするかと相談が続く。

口紅は派手な方が良くなど、まるで初デートを楽しみにしている女子高生のようだ。

実行まで、あと2日。

二人は、浩二を叩きのめすという妄想を肴に、ビール缶を手にしたのだった。

第二十五話 デートの誘い（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは、又来週更新します。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）
【ポチッ】とお
願いします

第二十六話　デートの朝

当日の朝は、雲ひとつ無い晴天だった。

「ドライブ日和だわ」

空を仰ぎながら、若菜が楽しそうに口を開いた。

未来は、若かりし頃の洋服をアレンジして着こなしている。

「やっぱり、いつもより若く見えるわよ」

「元々、若いのよ」

「そうね、そういう事しておくわ」

そう言いながら、用意しておいたポットを未来に差し出した。

「これ、私の特性コーヒーよ。浩二に飲ませてあげて」

「そんなの作ってあげたの？」

「そうよ、これは特別だから、未来は飲まないでよ」

「どう特別なのよ」

「下剤入りよ」

「じゃあ、運転中に飲ませたら・・・」

「運転を誤ってしまうかもね」

未来が、ポットをじっと見つめている。

「かなり強烈だから、現地について景色でも眺めながら、車の中でゆっくりと飲ませてよ。トイレも無いしね」

「悲惨だ」

「どうせなら、楽しまなくちゃね」

若菜がウインクして見せた。

「じゃ、私は一足先に現場に行ってるから。後は宜しくね」

「はいはい、楽しいドライブをしますよ」

「ちゃんと、録音しててよ」

「分かってますって」

未来が、ポットをバックに押し込むのを確認して、若菜が車のキーを手にした。

「浩二は迎えに来るんでしょ？」
「そうよ。この先のコンビ二までね」
「私の時は、駅前の通りだったのよ」
「コメントできない事言わないでよ」
「悔しいだけよ。でも、その悔しさも今日までだけだね」
若菜の目がキラッと光った。

車の中に激しい音楽が流れる。
あの日若菜と未来が出した結論は、以外にも単純な作戦だった。
未来がデートに誘い、浩二との会話を全て録音するのだ。
勿論、できるだけ証拠が集まる様に話を持っていく。
この辺は未来の営業テクニクに頼らざるを得ない所だ。
その録音を警察へ持って行く。
これだけで警察が動いてくれるとは思わないが、やってみなければ先へ進まないのだ。
警察がどう出るか。
果たして動いてくれるのかどうか？
それは、若菜にも未来にも未知の世界だ。

若菜は流れる景色に目をやりながらため息を付いた。
ハンドルを握る手に力が入る。
今更ながら、浩二が結婚詐欺師であって欲しく無いと思っているのだ。

それでいながら、今までの浩二の言動や行動を思い出せば、それは疑い様が無い。
未来にこんな事を言えば、「女心だね」と一笑されるのは分かり切っている。
いや、若菜自身浩二が嘘を付いている事は薄々分かっていたのだ。
分かっているながらも、信じたかった。

昔のように、熱く燃えたかったのかもしれない。

年齢を重ね、もう燃える事など無いと諦めていた人生に、浩二という光明を見たのかも知れない。

ハンドルをグッと右へ向ける。

減速と同時に車体がカーブする。

そして加速。

全てを吹っ切る為に、若菜の車がスピードを上げている様に見える。

スピードと共に浩二への思いを捨てる。

（浩二、最後のドライブよ！）

全ての景色が流れ、溶けて行く・・・。

溶けていく景色をぼんやりと眺めながら、未来はバックに忍ばせたペン型録音機のスイッチを入れた。膝の上に置かれたバックから、ペンの頭部分だけが露出しているが、誰が見ても決してそれが録音機であるとは分からないだろう。

浩二も同様、未来のバックに目を向ける事すらない。

自然の中の不自然。

不自然の中の自然。

駐車場から車が発進した時から、未来と浩二の二人っきりの時間が動き出した。

浩二はさも楽しいと言いたげに笑って見せる。

未来は、浩二に会えた嬉しさを伝え、どれほど浩二に惚れ込んでいるかと語った。

それは、二人が出会った事が自然であり、結ばれる運命であるかの様に語り続けられた。

浩二も又、未来に出会えた運命を神に感謝すると大仰に口にして見せた。

しかし、二人の役者の心の内は、全く別の所にある。

未来の携帯が鳴る。

「あ、ごめんなさい。メールだわ」

「いいよ、私は気にしないから」

「優しいのね」

メールを開くと若菜からだった。

『順調？』

『かなりね』

『お金の話が出てきそう？』

『最初のデートでそれは無理なんじゃない？』

『頑張つてよ！』

『分かつてるけどね』

（分かつてるけど最初からそんな話にはならないでしょうよ）

未来がため息を付きながら携帯をバックへ戻すと、浩二が笑いながら話しかけてきた。

「どうしたんだい？」

「ああ、友達なんですけど。お金に困ってる子で、貸して欲しいって言っんですよ」

「ほう、どの位貸して欲しいって言うの？」

「50万あればいいそうだけど」

「50万とは大きいね」

「ええ、借金があるとかって、可哀想だから貸してあげてもいいんだけど」

「貸すって、そんな大金を持つてるのかい？」

「ああ・・・言いませんでした？ 私の父、会社を経営していてお金の事ならいくらでも大丈夫なんです。私には甘いから」

「・・・そうだったの」

浩二の目が光った。

隣に座っている未来に、浩二の鋭い感覚が伝わって来た。

（乗ってきた！）

「以前にも、お金が無くて困ってる友達に100万貸してあげたん

「ただ、未だに返してくれないわ」

笑って見せる。

「それは酷いね。お父さんに怒られるんじゃないの？」

「あら、どうして？怒らないわ。困っている人がいたら助けてあげるのは当たり前じゃない？」

「・・・」

「浩さんも社長さんだから、私の父と同じ気持ちでしょ？」

「社長だからか」

浩二が可笑しそうに大きな声で笑って見せた。

「私は、そんなに大金を動かせる程の社長じゃないよ」

「そうなのかしら？」

「君はお嬢さんだから、分からないだろうけどね。社長にもいろいろあるんだよ」

「そうなの？」

「それじゃあ、君は豪邸に住んでいるのかな？」

「いいえ、一人よ」

「どうしてだい？」

「親元を離れるのも勉強でしょ？」

浩二が更に笑う。

「どうして笑うのかしら？」

未来が小首を傾げてみせる。

「いや・・・そうだね。一人で暮らすっていうのは大事な事だね」

（そうだよ、大事な事さ。一人なら、どんな状況でも作れるからな）

（ええ、そうよ。早く食いついていらつしゃい！）

浩二の手が未来の手を握って来た。

その手は大きく未来を包み込もうとしているように感じる筈だ。

だが未来は、何人もの女を泣かせ、苦しめたその手に嫌悪を感じていたのだった。

「今夜はずっと一緒に居られると嬉しいのだが、どうかな？」

「嬉しい！私もそう思っていたの！」

「この歳で、君のような可愛らしい人と出会えるなんて、私の人生に拍手を送りたいくらいだよ」

「年齢なんて関係ないわ。好きになる時は魔法が掛かったように時間が止まるんですもの」

「魔法か！じゃあ、その魔法で私も若返る事ができるかな？」

「貴方は今でも若いわ」

浩二が未来に目を向けて微笑んで見せた。

未来が浩二の顔に笑みを返す。

まるで、未来永劫愛し合う事を約束している様に、二人の演技が続く。

二人の心の声がお互いに聞こえたなら、未来は爆笑し、浩二は愕然とした事だろう。

残念ながら、二人の心の声がお互いの耳に木霊する事は無かったが。

未来はバツクに目を落とした。

（この会話、本当に若菜に聞かせていいのかしら・・・）

第二十六話 デートの朝（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは、又来週更新します。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ） 【ポチッ】とお
願いします

第二十七話 コーヒーの味

目の前が急に開け、崖の先に海が見渡せる。

車の窓を開けると潮風が車内いっぱいに入り込んできた。

「この景色が好きなの！」

未来が嬉しそうに叫んで見せた。

「海が見たかったの？」

「そう、海が好きなの」

「外に出てみるかい？」

「ええ、少し散歩したいわ」

二人が車から降り、崖に近付く姿を離れた所から若菜が凝視していた。

今二人が立つ崖が飛び降り自殺で有名な場所である事は、ネットで調べて知っていたのだ。

若菜の口元が歪んだ。

ちよつとした弾みで何が起こるか、それは誰にも分からないのだから。

「ロープが張ってあるね」

ロープのそばに《立ち入り禁止》の立て札。

「どうしてかしら？以前はこんなの無かったのに」

「危険だからだろうね。足を滑らせたら、ひとたまりも無さそうだからね」

「残念ね、もう少し先まで行って崖の下を見たかったのに」

本当に残念そうに未来が前を見据えた。

「仕方ないね。景色の良い所なら他にも知っているけど、行ってみるかい？」

「そうねえ・・・もう少し、ここに居たいわ」

「君がそうしたいなら、私は構わないよ」

「そうだ！私、コーヒーを作って来たのよ。飲むかしら？」

「それはありがたい。じゃあ、コーヒーを飲みながらゆつくりと海を眺める事にしようか」

二人は車に戻ると、若菜に渡されたポットを手にした。蓋を開け、カップに注ぐとコーヒーの芳しい香りが鼻腔をくすぐる。

「いい匂いだね」

「特性のコーヒーなのよ」

「それは嬉しいね。君が淹れてくれたのかい？」

「ええ、勿論よ。貴方の事を考えながら淹れたわ」

未来の手からカップを受け取ると、ゆつくりと口を付けた。

ほろ苦さが口中に広がり、微妙な刺激が残る。

「何という豆かな？」

「さあ？何だったかしら。いろいろと混ぜたから、分からないわ」

肩をすばませながら、未来が口を尖らせる。

「不味かったかしら？」

「いや、微妙に刺激が残るなと思ったただだよ」

「いろいろ混ぜたのがいけなかったかしら」

「大丈夫、美味しいよ。私の好みの味だよ」

「良かった！気に入ってくれたのね」

「勿論だよ。君も飲んだら？」

未来が顔を左右に振る。

「私はコーヒーは飲まないのよ」

「おや、そうだったかい。じゃあ、何を？」

「紅茶だわ。でも、今は喉が渴いてないから」

「・・・そうかい・・・」

浩二の体がかすかに揺れ出していた。

「どうしたの？」

「いや、何でかな。眠くなってきた・・・」

「変ね、どうしたのかしら」

「ああ・・・疲れが溜まっている・・・からかな・・・きつとりラ

ックス・・・して・・・」

カップが傾き出したのを未来が受け取る。

「少し寝るといいわ」

「・・・」

微かに口が動くが声が出て来ない。

携帯が鳴った。

「どう？」

「寝ちゃったよ」

「爆睡？」

未来が浩二の頬を抓る。

「うん、爆睡してるみたい」

「そっちへ行くわ」

未来が車から下りると、遠くに若菜の姿が映った。

近付いてくる若菜は薄っすらと微笑んでいた。

車から少し離れた所で若菜の歩みが止まった。

その姿は、海風に髪を躍らせ、じっと車を見つめてただ立ち尽くしている。

相変わらず、頬には薄っすらと笑みが浮かんでいるのだ。

周囲に人の気配は無く、波の音が聞こえて来るだけだ。

未来は若菜に近寄ると、話の口火を切った。

「あいつ、コーヒー飲んでる途中で眠くなったって言ってたわよ」

「そうでしょうね」

「何で？」

「体質・・・かしら」

「下剤の効果が無かったんだけど」

「睡眠効果はあったんじゃない？」

「本当に下剤だったの？」

若菜の目が冷ややかに未来を捕らえた。

そして又車へと視線を戻す。

「・・・象でも爆睡するわよ」

「やっぱり！睡眠薬ね！」

「そうね」

「どうして？」

「・・・暫く寝ていて欲しかったのよ」

「暫くって」

「録音したんでしょ？」

「したわよ」

「聞きましたよ」

「でも・・・最初から、詐欺行為を暴露できる様な言動は無かったわよ」

若菜が踵を返し歩き出した。

「待ってよ！どこへ行くの？」

「私の車よ」

「だって、このままじゃ・・・」

「言ったでしょ、象でも寝るって。3時間や4時間は爆睡してるわ」

二人は車へゆっくりと近付いて行った。

「私ね、本当の事言っと未だに信じられないのよ。本当は、未来の早とちりなんじゃないかって」

「若菜・・・」

「でもさ、確かに変だなんて思う様な事もたくさんあるのよね」

「・・・」

「現に彼は、実家に行ってる筈なのに、こうして未来とデートしてるしね」

「だから！」

「そうよ。これが現実で、彼は私を騙していたのよね」

若菜が寂しそうに笑う。

しかし、その笑いは引きつって見えた。

車の中に入ると若菜が手を差し出した。

「何？」

「信じられないからこそ、聞くのよ」

「聞いたら余計にシヨックで眠れなくなるわよ」

「とつくに眠れないから」

「・・・聞かせたくないんだけどな」

「見当は付いてるわ。どんな会話が繰り広げられていたか」

未来がバックから録音機を取り出し、再生ボタンを押した。

すると、楽しそうな浩二の声が聞こえて来た。

浩二と未来の二人の会話だ。

「言つとくけど、本心でこんな会話を楽しんでた訳じゃないからね」

未来は、心のどこかで浩二との心地好い時間を楽しんでいた自分を恥じるかの様に、未来に向けて口を尖らせて見せた。

若菜はそんな未来を横目で見ながら、笑うでもなく頷いて見せた。分かつているのだ。

浩二との会話がどれほど女心を和ませ、楽しませてくれるのかを。

浩二に掛かれば、どんな女でも心を奪われるだろう。

録音機から流れる楽しそうな二人の会話を聞けば、想像するまでも無くその場の雰囲気分かるうというものだ。

若菜は心に針が刺さるのを感じていた。

第二十七話 コーヒーの味（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
この続きは、又来週更新します。

ブログランキングに参加しています。

面白いと思われた方は（ ^ ^ ）
【ポチッ】とお
願いします

エピソード（前書き）

たくさんの方にお読みいただき、感謝に堪えません。
ありがたくも、最終話を迎えることができました。
心から感謝いたします。ありがとうございました。

エピローグ

録音を聞き終わる頃には、薄っすらと手に冷たい汗が滲んでいた。

嫉妬。

怒り。

憎しみ。

どこかで裏切られると分かっていた。
分かっていたながら、信じたかった。

二度とあの日と同じ別れを味わいたくないと思っていたのかもしれない。

若菜は録音機の停止ボタンを押すと未来へ返し、ゆっくりと顔を上げた。

その目は、はっきりとした決意をみなぎらせていた。

ぞっとする様な眼差しに出合った未来は、若菜の手を掴んだ。

「何をする気？」

「別に・・・あの人にぴったりのシュチエーションを用意するだけ」

「証拠を集めて警察に突き出すんでしょ」

若菜が未来の手をほどく。

「そうね・・・。そうしようと思っていたけど、それは彼にはふさわしくないわ」

「どういう事？」

「だって、警察に捕まるなんて・・・華麗な詐欺士が惨め過ぎるじゃない」

「・・・」

若菜は車から下りると、後部座席から大きな紙袋を取り出し歩き出した。

風が若菜を襲うが、髪が狂うように踊るだけで若菜の行く手を阻む事は出来ない。

一歩一歩を踏みしめる様に、進んで行くのだ。

未来も車から下りると、若菜の後について歩いた。

これから何が起こるのか、それを想像する事すら恐ろしく感じる。若菜が抱える大きな紙袋に一体何が入っているのか、問う事すら恐ろしい。

それでいながら、これから起こる事が予測できている。

その予測が、事実でなければ良いと念じずにはいられない。が、止める事も出来ない。

若菜の体全体から出る、得体の知れない怒りのせいなのか。それとも……。

車に到着すると、紙袋から手袋を取り出し、はめる。

（やっぱり……やっぱり殺す気なんだ！）

若菜の様子をじっと見つめながら、未来は自分の体が硬直して動けないのを感じていた。

（今止めなくちゃ、止めさせなくちゃ、若菜が殺人犯になっちゃう！）

しかし、声が出ない。

若菜の手に白い手袋がはめられ、ゆっくりと車のドアを開ける。

紙袋から練炭と火鉢を取り出すと火を点け、車内へ置いた。

そして、ゆっくりとドアを閉める。

たったそれだけの事だった。

しばらくすると車内に白い煙が立ち込め出した。

それを確認する様にじっと見つめ続ける。

手袋を外しながら、未来を振り返る。

「未来」

呼ばれて、はつと我に返ったがまだ動く事が出来ずにいると、若菜が未来の肩を叩いた。

「茫然自失って感じね」

可笑しそうに未来に笑顔を向ける。

未来は大きく深呼吸すると、やっと声が出る様になった。

「若菜・・・これ」

「うん」

「殺人だよ」

若菜は大きく頭を振ると、はつきりと言った。

「いいえ、ジ・サ・ツよ！」

「だって・・・」

「車の中を見て御覧なさい。ちゃんと遺書があるから」

「遺書って・・・」

「パソコンで打ったのよ」

「じゃあ、最初から？」

「違うわ・・・これは、賭け」

「賭け？」

「そうよ、浩二と未来の会話を聞いて、私の気持ちがどうなるか・・・そこに掛けたのよ」

「どういうこと？」

「私は彼を愛してる。それゆえに、許せるか・・・許せないか」

「許せなかったのね」

「・・・反対よ。許せた」

「それなら殺さなくても」

「さっきも言ったけど、彼ほどの人が警察に捕まるのは可哀想なのよ」

「・・・」

「私が突き出さなくても、いつか誰かが彼の罪を暴くわ。その時彼は獄中の人になる。そんな、哀れな姿は彼には似合わないの」

「でも！でも、殺したら若菜が犯罪者になるじゃない！今なら間に

合つわ、今なら助けられるよ」

「助けるつもりはないのよ。未来も手伝つてる以上は、同罪よ」
「えっ！」

若菜の冷やかな、それでいて悪戯つ子の様な眼差し。

それは、『未来が警察に言えば、未来自身も捕まるんだよ。だ・か・ら・同・罪なんだよ』と言っている様に見えた。

確かにそうだ。浩二を殺人現場に導いたのは、誰でもない自分自身なのだから。

何をどう言つた所で、その事実は変わり様が無いのだ。

「だから、二人だけの秘密。これでこの殺人劇が明るみになる事は無いでしょ」

「そんな・・・」

「大丈夫よ。彼は、自殺なんだから。ちゃんと遺書にそう書いてあるわ」

「・・・練炭自殺なら、車にメ張りをすると云うじゃない。その辺から、怪しまれて分かる事だよ」

「別に、100人自殺して100人がメ張りする訳じゃないでしょ。」

若菜が可笑しそうに笑う。

信じられないという目で未来が若菜を見つめているが、それすらも可笑しい様だ。

「だけど・・・死んじゃったら、お金は戻って来ないよ」

「・・・」

「生きていれば！警察に捕まれば！少しは戻ってくるかもしれない」

「・・・いいのよ。あんな端金」

「端金つて・・・だって、一生懸命貯めたお金じゃない！」

「いいのよ」

若菜の目が自信に満ちた笑いを浮かべるのが分かった。

「何で？何で、そんなに・・・」

「だって・・・保険に入っているんだもの」

「保険って・・・」

「8000万の保障よ。自殺だから、満額は出ないけどね」

あれは、浩二と出会って、浩二がプロポーズしてくれた日だった。若菜が新規が取れないと何度もぼやいていた時だ。

結婚するなら、保険に入って欲しいと提案した。

浩二は掛け金が払えないと渋ったが、結婚するのだから若菜が支払うという事で了解したのだった。

後は若菜が全ての手続きを行い、浩二はサインするだけだった。

浩二からしてみれば、結婚する気など無いのだから、保険に入ろうとどうしようとしても良い事だったのだ。若菜が掛け金を払うと言っのなら好きにすれば良いという簡単な気持ちだったのだろう。一方、若菜にしてみれば、保険に入れば会社への面子も立つ、それ以上に浩二に何があっても経済的には安心を得る事が出来るのだ。しかし、婚約者を新規の客にしたとあっては、さすがに古株のプライドが傷つく。

そこで、未だ新規が取れないという事にして欲しいと支店長に相談したのだ。

支店長からしてみれば、誰が新規で契約しようとか関係ない事だが、担当者本人が公表しないで欲しいと言うのだから、別段取り立てて言う程の事でもないとして承してくれたのだった。

「じゃあ・・・」

未来が若菜の話を聞き終わると擦れる声で言った。

「あれほどの金額が騙し取られても、最後は・・・こうなれば、多額の保険金を手に出来るから、惜しくは無かったという事だったのね」

「そんな事無いわ」

そんな事は無いと口では言っているが、確かに浩二が死んでくれれば、多額の保険金が入ると思っていなかったといえは嘘になるだ

ろう。

それも、半端な額ではないのだ。

浩二が詐欺士だと聞いてから、何度いつそ死んでくれたらと思った事か知れない。

その度に、恐ろしい事を考える自分に嫌悪を感じて来たのだ。

しかし、人間など所詮はそんなものかもしれない。

いつかは、こうなるだろうと分かっていたからこそ、睡眠薬も手に入れたのだ。

若菜は煙で中が見えない車をじっと見つめていた。

車中が白くなるに従って、若菜の脳裏に浮かぶ保険手続きの書類、手続きが完了すれば、間もなく受取人である若菜の口座へ、高額の保険金が振り込まれるだろう。

それから自分はどうするだろうか。

若い後輩達の白い目に晒されながら、今の仕事を続けていくのか。それとも、小さな店でも出してみようか。

そんな楽しそうな若菜の顔を、悔しさの募った未来の眼がじっと凝視していた。

その眼は憎しみと嫉みと・・・殺意を含んでいた。

風がうなりを上げて二人の間を通過して行った。

《完》

エピローグ（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました。

いかがでしたでしょうか？

あなた様の思ったとおりの展開でしたか・・・？

では、又次回作でお目にかかりたいと思います。

プログラミングに参加しています。

面白いと思われた方は（＾＾）【ポチッ】とお

願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5122m/>

ひとひらの夢

2011年3月5日15時55分発行